わが子のあゆみ

可児市立春里小学校（かにしりつはるさとしょうがっこう）

1年生を迎える会

6年生が中心となり、コロナ禍での会の企画や運営を工夫しました。会場づくり、プレゼント等、各学年で分担をし、当日の会を迎えました。1年生が会場まで廊下を歩く中、2～5年生は廊下に立ち、1年生を拍手で見送りました。会場となった体育館では、6年生と1年生が一緒に楽しいひと時を過ごしました。

仲間と知恵を出し合い、協力し、自分たちで行事を作っていく姿をこれからも大切に、学校生活を進めていきます。

2021.9
No.467
初秋号
第73巻2号
9

［なかつがわしりつなえぎしょうがっこう］

中津川市立苗木小学校

●住　所　〒508-0101 中津川市苗木2083番地
●TEL　0573-66-1304
●児童数　333名

〈地域の自然や風土〉

苗木地区は、南に木曽川の雄大な流れ、さらに恵那山を望む自然豊かな地区です。苗木城跡、遠山史料館、夜明けの森、鉱物博物館などが校区にあり、歴史・文化の香りが高いです。苗木小学校は苗木藩の藩校である日新館を前身とする歴史ある小学校です。

各地区には「豆学校」と呼ばれる地域児童会があり、集団登校や遊びの中心となってきました。保護者や地域の方々にはボランティアの講師として、朝読書の時間の読み聞かせや、教科、総合的な学習の時間、クラブ活動等で、積極的に参加していただいています。こうした地域のあたたかさと教育力に支えられ、子どもたちは健やかに育っています。

校舎

学校の教育目標

心ゆたかで　たくましい　苗木の子
～よく考える子 心やさしい子 じょうぶな子～

学校のたからもの①
あいさつ　そうじ　豆学校

児童会が「苗木小3つの宝」として、大切にしている活動が「あいさつ　そうじ　豆学校」です。

笑顔で明るい挨拶は、相手を大切にする心のあらわれであり互いを元気にします。昨年度から続くコロナ禍で、あいさつを呼びかける活動は制限されますが、毎日の給食時間の放送ですてきなあいさつをした仲間の姿を紹介しています。「大きな声でのあいさつ」だけでなく、「先がけあいさつ」「明るい声であいさつ」「笑顔であいさつ」「お辞儀をしてあいさつ」など、コロナ禍でもできる心の伝え方にも目を向けています。

清掃活動は、自分たちの学校生活を支えてくれるものへの感謝の気持ちを込めて行います。全校一斉に「始めます！」とあいさつをして、清掃活動が始まります。一年生は六年生に習って、道具の使い方や掃除の仕方を覚えます。一通りの清掃が終わったら、気付いたところの清掃です。溝の砂をすくって出したり、剥がれた掲示物を直したり、扉の下にたまったほこりを取ったりと、それぞれに考えて時間いっぱい活動します。「美しくしたい」という思いがあるから、掃除するべきところが見つかります。

豆学校（異年齢集団）での活動は、支え合う気持ちや自治の力を高めます。毎週月曜日の二十分休みは「豆学校遊び」があります。集団登下校をする仲間と、学年を超えて一緒に遊びます。豆校長（豆学校のリーダー）は仲間の意見を聞いて遊びの内容を決めます。上手く輪に入れない子に声を掛けるのも、トラブルの解決も豆校長を中心とした高学年の役目です。豆学校での活動を通じて、異年齢で活動する楽しさや難しさ、「お兄さん、お姉さん」としての姿を学びます。一、二年生だけで下校することを苗木小では「こまめ下校」といいますが、その時は、二年生の児童が頼もしい「お兄さん、お姉さんの顔」になります。

創立150周年記念に作られた横断幕

「こまめ下校」の集合の様子

児童玄関外の溝にたまった砂をかき出す児童

「すてきなあいさつ」を紹介するカード

風流おどりの練習風景

学校のたからもの②
家庭や地域に支えられた活動

保護者や地域の方々が、ボランティアとして学校での活動に積極的に参加してくださいます。

苗木小学校では、低学年はキッズソーラン、中学年は花笠踊り、高学年は風流（ふりゅう）おどりに取り組みます。中でも高学年は、風流おどり苗木小学連の方に週に一回のご指導いただいて、五月から練習を始めます。風流おどりは旧苗木藩主遠山家で発見された一枚の絵図に描かれた踊りより始まりました。背中にのぼり旗を付けて太鼓を打ちながらの踊りに加え、笛や鉦（かね）の演奏など、おどりを伝承する方々の協力無くしては受け継いでいくことができません。昼休みや夏休みの自主練習も重ね、運動会だけでなく「おいでん祭」「あんどん祭り」など地元のお祭りでも披露します。

また、クラブ活動においては、十六年以上にわたり講師を務めてくださっている地域の方がいらっしゃいます。自分のおじいさん、おばあさんよりさらに年配の方から学べることを楽しみにしている児童も大勢います。また、保護者の方の協力も厚く、朝読書の時間の読み聞かせなど現在は控えている活動もありますが、「コロナ禍が去ったら再開したい」と準備を進めてくださっています。

風流おどりを運動会で披露

［たかやましりつにししょうがっこう］

高山市立西小学校

●住　所　〒506-0007
高山市総和町2丁目18番地1
●TEL　0577-32-0012
●児童数　153名

〈地域の自然や風土〉

高山市立西小学校は、飛騨高山の中心に位置し、校区には例年たくさんの観光客でにぎわう秋の高山祭が行われる櫻山八幡宮や屋台蔵がある、開校一二五年を迎えた歴史ある小学校です。国際観光都市「飛騨高山」の文化・観光・商業の中心地として、伝統を大切にし、今に受け継いでいる地域です。

子どもたちは毎朝高山の街の中を、「おはようございます！」と元気にあいさつを交わしながら登校してきます。その姿を地域の方々は温かく見守ってくださり、子どもたちの日々の生活や行事、学習にも積極的にかかわってくださっています。

校舎

学校の教育目標

心ゆたかに　たくましく　生きる子

学校のたからもの①

校種を越えてのつながり「保小連携」

西小学校と総和保育園とは、平成二十年度より、同じ敷地内にあり体育館でつながっていることを生かして、さまざまな連携を取っています。昨年度から今年度にかけては、新型コロナウイルス感染症予防をしながら、今まで同様、小一ギャップがなくなるよう取り組みを考え、活動しています。

(1)こいのぼり集会(一年生と年長)

保育園児と小学生がそれぞれ作ったこいのぼりのうろこを持ち寄り、一年生がこいのぼりに貼って仕上げます。出来上がったこいのぼりは、保育園に届け、贈呈式後に園庭に揚げられ、元気よく泳ぐ姿が見られました。

(2)花の苗植え(四年生と年長)

プランターに花の苗を植え替える作業を、四年生と年長児が一緒に行います。今年は、接触を減らすために四年生が説明の仕方を工夫し、植え替えのやり方を絵にしてわかりやすく説明してくれました。実際に植え替えるときは、年長児がうまくできるように四年生は見守ったり、やさしくアドバイスしたりして、楽しく活動できました。

「こいのぼり集会」たなびくこいのぼり

「花の苗植え」一緒に水やり

「花もち」保育園児が学校に届けてくれました

「クラブ活動」将棋クラブ

「祭り体験」からくり体験

「フランス交流」
PTAの方に英文を確認してもらう

「祭り体験」屋台体験

(3)花もち

飛騨の冬の名物「花もち」を保育園児が作成し、小学校に毎年届けてくれます。桃色の花もちは寒い冬にぱっと花が咲いたようで、みんなを明るい気持ちにしてくれます。

学校のたからもの②

ふるさととのつながり

登校の見守りや、地域のサークル活動などで子どもたちと地域のみなさんが触れ合うことが多いこの地区は、学校とのつながりも強く、行事や活動に地域の方がたくさんかかわってえ、教えてくださっています。

「クラブ活動」

年に五回行うクラブ活動は、子どもたちが自分のやってみたいことを選んで取り組む、楽しい活動の一つです。七つあるクラブのうち、囃子、将棋、化学、茶道、手芸クラブは地域の方が先生となって、分かりやすく、じっくり時間をかけて指導してくださいます。

これまでに
作ったパンフレット

「祭り体験」

西小学校の四年生から六年生の児童が、秋の高山祭に七台の屋台に分かれて乗る体験をさせてもらっています。六年目となる昨年度は高山祭が中止となり、祭りで屋台に乗ることはできませんでしたが、その代わりに屋台会館に展示してある本物の屋台のうちの一台に六年生が乗せてもらうことができました。地域に今も残る伝統を地域の方の協力で体験できることは、自分のふるさとに誇りを持ち、大切に思う心づくりにつながっています。

「パンフレットづくり」

毎年六年生が、ふるさとのすばらしさを様々な角度から調べ、紹介するパンフレットづくりを行っています。観光客にも見てもらえるように、宿泊施設や商店にも配布して、高山の良さを広める活動を続けています。調べることによって、今まで知らなかったふるさとの良さを見つけることができるのも、この活動の良いところです。

学校のたからもの③

海外とのつながり「フランス交流」

四年目となるフランスとの交流は、PTAの協力のもと、毎年五年生が行っています。自己紹介をお互い英語で書き、一年間文通で学校の様子などを交流し合います。日本とは違う文化や暮らしぶりに驚き、それぞれの国の良さを実感として学べる活動です。交流期間が終わっても、ペンフレンドとして交流を続けている子もいます。グローバルな視野を持つことができる貴重な学習です。

［ぎふしりつさいごうしょうがっこう］

岐阜市立西郷小学校

●住　所　〒501-1177
岐阜市中西郷4丁目261番地
●TEL　058-239-0985
●児童数　519名

〈地域の自然や風土〉

本校は、岐阜市の北西部、本巣市と隣接する位置にあります。校区には、お寺や神社、建物、句の刻まれた石の道標など、歴史を伝える場所やものが数多く残されています。また、春にはツブラジイの花が美しい船来山とレンゲ畑が広がり、校区の中央には、ホタルが舞う美しい板屋川が流れています。宅地化が進む一方、地域には農業従事者も多く、水田やブロッコリー畑もみられ、自然豊かな地域です。

校舎

聴いて話して「学び合い」

学校の教育目標

仲間を思いやる子
自ら学び考える子
たくましくやりぬく子
～たくましく伸びゆく子ども～

【願う児童の姿】
・自他の命を大切にする子
・よりよい自分&生き方を求め、挑み続ける子

学校のたからもの①

全校で取り組む『西郷小3つの自慢「あいさつ・学び合い・もくもく掃除」』

①自分から先がけあいさつ

目と目でかわす「あいさつ」は、明るい声でいつでもどこでも誰にでも、自分から先がけてあいさつすることによって、仲間とともに温かい気持ちで生活できることを目指して取り組んでいます。学校内だけでなく、子ども達を見守ってくださる全ての地域の方にも、心のこもったあいさつを届けたいと考えています。また、児童会の各委員会から、全校児童の素敵な姿を紹介したり、執行委員会が、「あったかい言葉キャンペーン」など「いじめ」について考えていく取組を行ったりするなど、全校のみんなが仲間を思いやり笑顔で過ごせる活動をしています。毎日の昼の放送では、全校の仲間の「よいところ」を知ることができ、自分たちにも取り入れていけるのは、西郷小のたからものです。

②聴いて話して「学び合い」

一人一人が主体的に仲間と「学び合い」ができるように、どの活動でも学習姿勢づくりを大切にしています。「聴く」は相手を大切にすること・「話す」は自分の思いや考えを仲間に理解してもらう大切なこととして取り組んでいます。うなずいたり、つぶやいたり、すぐ反応したりするなど、仲間の考えのよさを自分に取り入れながら話したり、「ノート展」から仲間の書き方・まとめ方からよさを取り入れたりして、学び合う姿を広めています。また、一人一台のタブレット端末を活用し、仲間の考え方や動き・作品等を見たり聴いたりして、より具体的な交流をしながら楽しく学び合いができているのも、西郷小のたからものです。

③心も磨く「もくもく掃除」

心も磨く「もくもく掃除」では、掃除時間をめいっぱい使い、隅々まで丁寧に汚れやごみをとり、黙々と校内を美しくする活動に取り組んでいます。教職員も子どもたちと一緒に掃除を行う中で、学活や道徳の授業だけでなく、こうした日々の活動から〝美しい環境は心も美しく整う〟ことを感じ取っています。また、美化委員会のキャンペーン活動を全面に生かして、全校児童の粘り強く掃除に取り組む姿を高めながら美しい校内にしているのも、西郷小のたからものです。

心も磨く「もくもく掃除」

毎朝の消毒ボランティア
「しっかり予防しようね」

学校のたからもの②

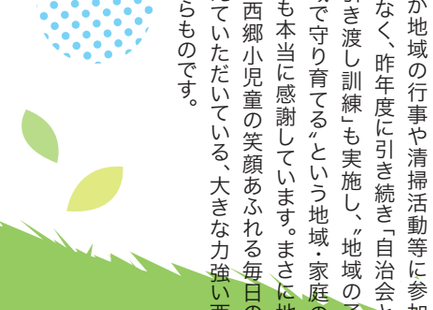
地域の力に支えられて
～岐阜市型コミュニティスクール～

児童の健全育成と一層開かれた信頼される学校づくりの実現を目指す学校運営協議会のもと、学校・地域・家庭がそれぞれの役割と責任を果たしながら、互いに連携を図って活動しています。特に新型コロナウイルス感染症予防対策の対応については、多大なご支援・ご協力のもと、現在も全校児童の安全で安心できる学校生活を実現することができています。

支援推進委員会は、学習支援・地域活動・人権部会の三部会からなりますが、総合的な学習の時間や生活科の講師やゲストティーチャー、家庭科ボランティア先生、読み聞かせボランティア、見守り隊ボランティア等、本校の教育活動への積極的な地域の支援があります。また、児童が地域の行事や清掃活動等に参加するだけでなく、昨年度に引き続き「自治会と連携した引き渡し訓練」も実施し、〝地域の子どもは地域で守り育てる〟という地域・家庭の強い思いにも本当に感謝しています。まさに地域ぐるみで西郷小児童の笑顔あふれる毎日の生活を支えていただいている、大きな力強い西郷小のたからものです。

家庭科学習ボランティア
「分かりやすくて嬉しいです」

総合的な学習の時間　5年生米作り
稲刈り作業「丁寧で早い。さすがです」



読み聞かせのボランティア
「とっても楽しいよ」

見守り隊のボランティアの方々に
感謝の気持ちを伝えました

［おおのちょうりついとうちゅうがっこう］

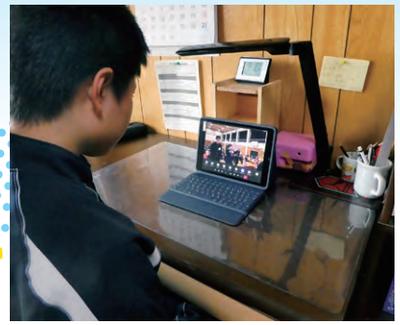
大野町立揖東中学校

●住　所　〒503-0555 揖斐郡大野町大字公郷3261-3
●TEL　0585-32-0503
●生徒数　179名

〈地域の自然や風土〉

揖東中学校は、岐阜県の西部に位置し、学校の西には揖斐川が流れており、東には田園が広がり、豊かな自然に囲まれた学校です。また、揖斐川の河川敷には、グライダーの発着場があり、時々真っ白なグライダーが校舎の上空を飛んでいきます。春には、グランド横の桜が満開になり、生徒たちの新しい年度のスタートを華やかにしてくれています。

校舎


卒業式 自宅で生配信された卒業式の動画を視聴

揖東

学校の教育目標

自立…主体的に学び合う生徒
友愛…よさや違いを尊重する生徒
気力…粘り強くやり抜き自己実現を図る生徒

学校のたからもの①
学校生活を豊かにするICTの有効活用

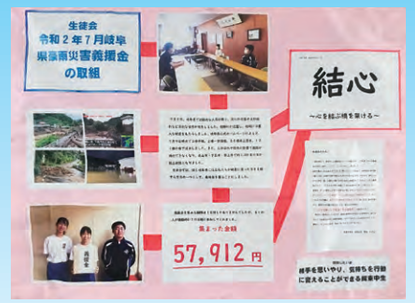
本校は、昨年十一月に生徒一人ひとりにタブレットの配備が完了し、貸与式を終えてからは、授業や生徒会活動、行事等での活用を図っています。

昨年度の卒業式は、新型コロナウイルス感染症対策のために、在校生は参加することができませんでした。そこで、在校生一人ひとりにタブレットを持ち帰らせ、自宅で学校から生配信した卒業式の映像を視聴し、お世話になった先輩たちを画面越しに見届けました。「先輩からは見えなくても、感謝の気持ちをもって見送りたい。」と語っていた在校生もいました。また、授業においても、タブレットを効果的に活用して『主体的・対話的で深い学び』の実現をめざしています。理科においては、実験結果をタブレットで撮影し、班員と相談しながら考察したり、シミュレーションを用いて説明したりすることで、学びを深めています。国語科や社会科においては、タブレットに自分の考えを書き込んで仲間と交流したり、モニターを通して全体交流をしたりするなど、効果的な活用を探りながら実践をしています。

シミュレーションを使っての説明（理科）

学校のたからもの②
主体性を発揮し学校生活に磨きをかける生徒会活動

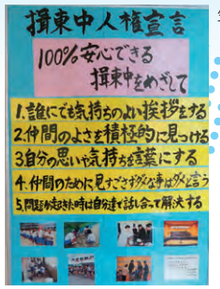
本校は、あらゆる場面で生徒が主体性を発揮する姿をめざしています。学校を訪問された方々から、爽やかな挨拶や黙々と掃除をする姿、意見交流を柱にしながら互いに切磋琢磨する授業姿勢などを褒めていただいています。この姿は、生徒会が中心となって実施した『挨拶・掃除・学習などの取組』を当たり前のようにやり切り、三年生を中心に姿で示してきた成果だと考えています。また、昨年度より、生徒会を中心に『主体性』をキーワードに掲げて活動したものとして、岐阜県豪雨災害に対する義援金募金やタブレット活用のルール作成、ボランティアによる落ち葉はきなどがあります。さらに、成長した自分の姿や築き上げた学年の財産を共に語り合う『三年生と語る会』や『伝統を引き継ぐ会』を自分たちで企画・運営する中で主体性を存分に発揮しました。このように主体性を発揮し学校生活に磨きをかけたことは、授業や係活動の充実につながり、本校の教育理念である『一人一人の笑顔が輝く学校づくり』に向けた強力な原動力になったと考えています。



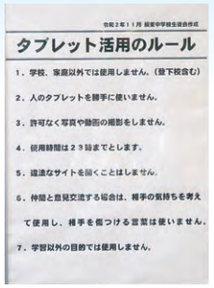
生徒会による『義援金の取組』

ボランティアでの落ち葉はき

地域の方による『校地内の除草作業』



生徒玄関に掲示してある『揖東中人権宣言』



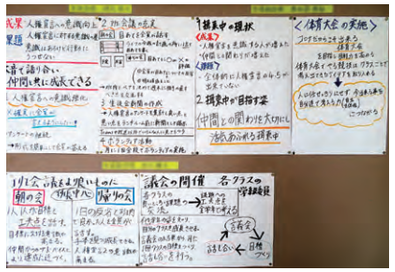
生徒会が決めたタブレット活用のルール

学校のたからもの③
『人権宣言』を踏まえた人権教育の推進

本校では、生徒会が中心となって『人権宣言』を行い、年間を通して人権感覚を磨く活動を行っています。『人権宣言』には、

①誰にでも気持ちのよい挨拶をする
②仲間のよさを積極的に見つける
③自分の思いや気持ちを言葉にする
④仲間のために見すごさずダメな事はダメと言う
⑤問題が起きた時は自分達で話し合って解決する

という五点があります。これらのことを大切にし、人権教育の中心となる活動『ポッポ活動』を実践し、仲間のよさを積極的に見つけ、見つけた具体的な姿を毎週全校に放送しています。この活動は、生徒の自己肯定感や自己有用感を高めることや、仲間を大切にする心情を育てることにつながってきています。


生徒会 活動計画

最後に

学校運営協議会や公民館長の方々の協働・連携による『校地内の除草作業』やスクールサポートスタッフによる『教室への給食運搬や校舎内の消毒』で大変お世話になっています。保護者や地域の方々の支えがあってこそ、安心・安全な学校生活を今日も送ることができていると考えています。

美しさを求める掃除

オンライン朝の会

7月号を読んで

3人の娘と1人の息子の4人を育てていますが、喧嘩をしてもすぐには入らず、どちらかが泣いたら止めに入る事にしていました。今では、一番上は21歳になり、言葉の言い合いくらいしかありません。（Iさん）

「親子でサイエンス」のアイスクリームを作りました。娘と一緒にスーパーへ買い出しに行くのも楽しい一時でした。お風呂上がりに一緒に作りましたが、簡単に作れてすごくおいしかったです。もうすぐ夏休みなので、他の実験もやってみたいと思います。（Aさん）

楽しい読み聞かせのページを楽しく読ませていただきました。他の小学校でもボランティアの方がそれぞれの学年を考え、本を選び子どもたちの様子を楽しみながら読み聞かせている様子が伝わってきました。娘の小学校も読み聞かせをしていますが、コロナ禍で5、6月はお休みでした。7月は2ヶ月ぶりにできて、子どもたちがすごく楽しみにしていてくれた気持ちが伝わってきました。本を通じた子どもたちとの交流ができて、読み聞かせはステキです。（Sさん）

子どもたちの作った「なぞなぞ」をいつも楽しみにしています。（Tさん）

パソコン、スマートフォンの普及で、インターネットは私たちの生活に身近な物となりました。メール、調べ物、ゲームなど、とても便利です。しかし、犯罪やトラブルに巻き込まれることもあり、子どもの使用にはとても不安があります。まずは、「子どもと一緒に我が家の約束作りをすることが大切。」だと書いてありました。万が一トラブルが生じたときには、子どもが一人で抱え込まず、すぐに何でも相談できるような親子関係でありたいと思いました。（Iさん）

「なぜ、筒は回るの？」…キーワードにあった「フレミングの左手」は、どこかで聞いたことのある言葉でしたが、「作れそうかな」と思い挑戦してみました。どんなふうに回るのかも想像がつきませんでしたが、乾電池にアルミ箔をかぶせたとたんに回ったのには感動しました。なぜ回るのかを調べましたが、いまだに分かりません。先生に聞いてみようと思います。（Mさん）

ベルマークの集計はなくなってしまいましたが、まだ続いている学校（羽島市立正木小学校）があると知り、ベルマークを寄付したいです。（Kさん）

「県立大垣桜高校まんが研究部」のまんがが上手でした。（Sさん）

もくじ　わが子のあゆみ　2021.9 No.467 初秋号

表紙　可児市立春里小学校
1　学校のたからもの　中津川市立苗木小学校／高山市立西小学校　岐阜市立西郷小学校／大野町立揖東中学校
11　特集　「社会の変化とこれからの子育て」前編
17　みんなで家庭教育！　岐阜県環境生活部環境生活政策課
18　先生！ありがとう！　保護者から先生へ贈る感謝の400字メッセージ　安江 美沙紀
19　「多様性尊重の教育⑳」　みんな、いっしょに　安田 和夫
21　保健室ノート　平林 里美
23　私の先生㊺　辻 香子
25　わが家の宝物　水澤 賢一朗
26　リレーエッセイ⑮　辻 智秀
27　子育て半生記　菱田 宗宏
29　楽しい読み聞かせ⑭　郡上市立相生小学校PTA
31　親の背中⑨　窪田 佳奈・大澤 ゆかり
33　私が出会った1冊の本【続50】　樋田 真也・沖野 真紀
35　子の思い　たて ももか・仲野 未希・柴田 真緒
親の願い　狩谷 信孝・兼松 芳夫
教育の窓　川松 雅史・澤田 憲孝
40　話そう!語ろう!わが家の約束　髙井 克行・桒山 一嘉
41　親子ではてな
42　お試しクッキング　岐阜県学校栄養士会
43　ふるさとの伝承　高山市立久々野中学校
45　きらり！キッズ！　岐阜市立長森南小学校
47　夢中！熱中！我らが部活　垂井町立北中学校
49　私たちのＰＴＡ　土岐市立妻木小学校ＰＴＡ

分かってるなぁ

と感じる保険へ。

価値観も、生き方も、広がる時代に。
あなたが「分かってるなぁ」と
感じられる保険であるために。
私たちはAIを活用し、
一人ひとりにベストなプランの提案を、
保険代理店とともに進めています。
三井住友海上の保険は、あなたから始まる。
キーワードは、パーソナライズです。

つぎの、三井住友海上へ。

業界初！
ベストプラン提案型AIシステム
MS1 Brain

AIがお客さまのニーズを予測・分析。
最適な商品・サービスの提案につなげます。
さらに面談またはチャットによる相談から契約完了まで、
全てリモートで行え、スムーズなお手続きが可能です。

※リモート契約手続きは、自動車保険が対象です。取扱商品は順次拡大します。　※画面はイメージです。

MS&AD　三井住友海上

特設コンテンツ

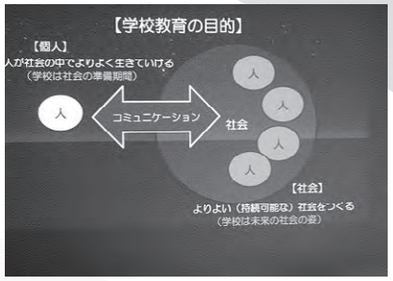
記念講演「社会の変化とこれからの子育て」前編

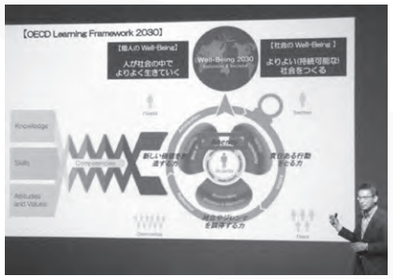
横浜創英中学・高等学校長　工藤 勇一 さん

これからの学校教育のあるべき姿

これは、僕が、学校教育のあり方を図式化した物です。学校教育を二つの目的でやっています。

一つ目は、一人ひとりの子どもたち、障がいがあってもなくても、どんな子どもであっても、社会の中でよりよく生きていけるようにしてあげる、それが学校の役割であるはずです。これは、昔から変わっていないかもしれないですね。二つ目の「より良い社会をつくる」ここの部分については、ずいぶん変わりました。昔の学校教育の目的は、一言で言えば、富国強兵です。国民に学問を与えて、経済を豊かにして、幸せな国を作るということ。そして兵力を強くして、他国と対等に渡り合える国を作る。もしかすると日本は、未だにそれを引きずっているのかもしれません。常に、外国と比べてペーパーの学力が高いとか低いとか、PISAの調査なんかを使いながら、そんなことばかりが話題になる。でも、世界中が今変わってきたんです。世界中が今、教育改革をしているんです。さっき見せた僕の図式みたいな物は、この十年ぐらいで定まってきたんですよ。





ようやく、世界において学校教育の目的ってこれなんじゃないか、これを示しているものが、OECDのランニングフレームワークって言われる二〇三〇年を目指した教育目標なんです。世界が持続可能なより良い社会を実現するための三つの力がここに書いてあります。一つ目は、責任ある行動をとる力ですね。二つ目は、日本では徳育と言われている心の教育なんですけど、世界は心の教育ではありません。いろんな人が生きていくということは、当然対立も起こるし、ジレンマも起こる、矛盾が起こるのは当たり前だっていうことです。戦争だけではないです。世の中が持続可能になるためには、対話を通して調停していく多様な力が必要だということですから、日頃から多様な人たちを受け入れて、対立が起きても感情をコントロールして、理性で対話ができる力を身に付けていく、そして上位の目的で合意するといったことですね。もう一つは、これがいわゆる学力です。日本の学力の捉え方とはずいぶん違います。世の中には、いろんな課題があります。それを新しい価値、新しいシステム、技術を生み出して解決していこうということなんです。

何故この考え方ができたかというと、象徴的なのが環境問題です。二酸化炭素の排出で、地球温暖化の問題が伝えられています。地球温暖化が起こると、当然温度が上がりますから極地の氷が溶ける。この溶けた氷ですけど、グリーンランドで、一昨年、一年間で溶けた氷を東京23区に注ぎ込むと、何と水位は八百メートル上がるそうです。スカイツリーが沈みます。地球がどんどん砂漠化すると、それに伴って気温が上がり、台風だとかハリケーンだとか、世界中で規模が大きくなっていて、その被害は年々増すばかりになっています。新型コロナウイルスの問題もずいぶん長くなりましたけど、先ほどのグリーンランドの氷が溶ける。その下に凍った土があります

けど、その土の中には、太古のウイルスがたくさん含まれているということが分かっています。ですから、環境問題一つとっても、我々人類が本当に生き残れるかどうか分かんないということですね。二〇三〇年という年、今から九年後ですけど、人類が存続できるか、その分かれ道になる年と言われています。そのくらい切羽詰まっているんですね。環境問題だけではありません、食糧問題、人口爆発、自分の国だけでは問題解決できません。それで作られたのが、SDGsです。この十七個の目標は、ずいぶん考えられたそうです。国連で採択したんですが、どの問題一つとっても、何かの問題を解決しようとすると、何かが解決できないという、そんなジレンマをはらんでいる。例えば、貧困をなくして飢餓をゼロにしよう、経済を豊かにしよう。そのために、ブラジルのジャングルがどんどん伐採され、それを木材として使ったり、または、そこを焼いて畑に変えていく。でも、そのために環境が破壊されているということが起こっている。それが地球上のあちこちでです。だから、誰一人置き去りにしないっていう、持続可能なデベロップメント・ゴールズ、持続可能な方向でみんなで開発するということです。その答えをみんなで見つけていかないかということなんですね。

子どもたちに当事者意識を持たせる

地球上で起こっている対立ジレンマを解決する力、対話をし合意する力が求められているということなんですけど、そのことに最も敏感な国々がたぶんヨーロッパ連合です。ヨーロッパ連合ができたということは、我々日本人が考えている以上に奇跡的なことなんだと思うんです。何故かというと、二十七か国がこれまで、千年、二千年と、国境一つとってみてもすごく変化していて、国ができたりなくなったり、ずっと戦争をし続けてきました。彼らにとってもものすごく大きかったのが、第二次世界大戦です。科学技術が進歩して、飛行機が飛んで、爆弾を落とされ焼け野原になり大勢の人が亡くなった。このことは、このヨーロッパの方々にとっては、ドイツ・ナチスに対する恨みつらみよりも遙かに大きいことなんですね。もう二度と戦争を起こしてはいけない。戦争になる原因はというと、資源です。その資源を独り占めしようとすると、当然戦争が起きる。ですから、戦争が起こらないようにするために、資源はみんなで使おうということです。また、どこかの安い牛肉が入ってくれれば、自分の国の農家が困る。でも、この貿易問題よりも大事なのは、戦争を起こさないことだ。だから、彼らは、なんと関税をゼロにしたんです。国民に説明するわけです。関税をゼロにする事の方が、みんなが幸せに暮らせる、将来持続可能だということを国のトップリーダーが、国のあらゆる人たちに説明します。それにみんなが賛成をしてEUに加盟していく。つまり、対立ジレンマを、上位の目的で手を握って合意するという裁量をするわけです。日本でこれできるでしょうか。何故かと言ったら、子どもの頃からその訓練をしていないからです。もう一回この目標を見てもらいたいんですけど、日本が持続可能にするためには、いろんなジレンマに対応して合意する必要がある。ここに、エージェン

講師紹介

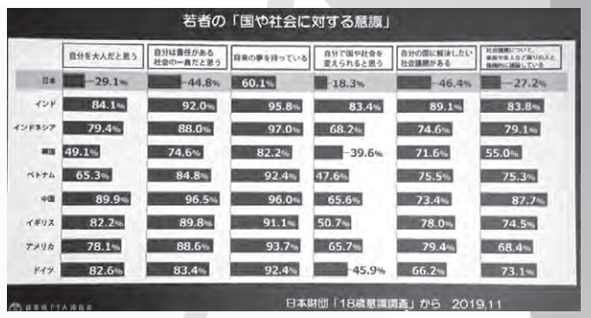
横浜創英中学・高等学校長。山形県で数学の中学教諭を五年務めた後、東京都台東区の中学校に赴任。その後、東京都や目黒区の教育委員会、新宿区教育委員会教育指導課長などを経て、二〇一四年から六年間、千代田区立麹町中学校の校長を務め、教育改革に取り組む。現在、内閣官房教育再生実行会議委員や経済産業省「Edtech」委員などの公職も務める。

シーという言葉があります。このエージェンシーという言葉には、なかなか日本語訳がなかったんですが、麹町中でやっていた取り組み、それがまさにこれなんです。子どもたちに当事者意識を持たせるんです。麹町中のあらゆる改革は、子どもたちとか、保護者が参加して決めていったんです。僕のアイデアだけじゃなくて、教員や子どもたちのアイデアで変化していった学校です。当事者意識というのは、最も世界中で大事だと言われている課題なんです。

自己肯定感や幸福度を低くさせる教育

今、世界は、どんどん科学技術が進歩しているわけですけど、当然、子どもたちが生きていく時代は、一つの会社に就職して定年までという時代ではないですね。新たな仕事が生まれて、その仕事もあっという間に消えていくという時代です。そこで重要なことは、益々自己決定する力が必要となってくるということです。

これは、世界九か国の主に高校三年生に対して調査をした結果です。質問は六つです。最初の三つの質問はもっとひどいです。自分で国や社会を変えられると思いますか…答えた生徒は五人に一人にも満たない。自分の国には解決したい社会課題がありますか、その議論



をしていますか…これも他の国々と比べるとダントツで低いです。この調査結果に対して、経済のトップの方々は、みんな愕然としています。学力が高いとか低いとかといったレベルではなく、日本の教育の最大の課題はここにあるということです。ユニセフが行った幸福度調査、世界三十八か国で行いました。三十八か国中、からだの成長は世界第一位です。でも心の幸福度は、下から二番目です。次の調査見ても日本の子どもたちの特徴が現れます。自己肯定感です、自分自身に満足していますか?これ七か国ですけど、ダントツで低いです。日本の子どもたちの最大の課題は、読解力が高いとか低いとか、そういったレベルではなく、与えられることに慣れきった子どもたちだということです。子どもの頃から、とにかく手をかけます。親は当然ですけど、子どもの成長を心配するので、少しでもいい環境を与えたいと思いますね。親心からすれば当然です。それに、いろんなサービス産業が応えようとします。学校も含めてです。とにかく手をかけます。手をかけて手をかけて、あれをしなさい、これをしなさい、あれをやめなさい。そう言われた子どもはだんだん自分で物事を考えられなくなります。自分で物事を考えられなくなった、つまり自律できなかった子どもは、うまくいかないことがあると、必ず他人のせいにします。勉強が分かんないのは、先生の教え方が悪いからだと言います。本当でしょうか。子どもの当事者意識が欠けているんですよ。与えてもらうということに慣れきっているので、この発想しか出ないということです。主体性を失った子どもっていうのは、実は劣等感でいっぱいです。自己肯定感が低いということです。自己肯定感が低い子どもは他人に優しくなれません。他人に優しくなれない不幸な気持ちなんですね。幸福度が低いということです。与え続ける教育っていうものを日本はいつの間にか続けてしまっています。主体性を失い、当事者意識を失い、自己肯定感も幸福度も低いといった教育をです。

誰も疑問に思わず正しいと思ってやっている

何故そんなことが起こったのかということなんですが、一言で言ったら、教育界で蔓延している手段の目的化です。一番分かりやすいのは、学習指導要領ですね。百年以上も続いている知・徳・体です。日本中の学校の教育目標が、何故か生きる力を育成するためには、確かな学力、豊かな人間性、体力・健康、それをバランス良く育てる事だと言います。どういう意味でしょうか。皆さん考えたことありますか。知・徳・体をバランス良く育てると本当に生きる力が育つんですかということです。みんなが何も考えなくなったんですよ。どの自治体に行ってもみんなそうです。日本はこれに躍起になっています。特に、ここに注目がいくんですね。全国一斉学力テスト、メディアがあおります。どこが高いとか低いとか。だから、躍起になってペーパーの学力を上げようとする。ペーパーの学力を上げる方法は簡単です。繰り返せばいいだけです。宿題もたくさん出せばいいんです。たくさん量をやらせれば、必ずペーパーの学力は上がります。でも、手をかけて学力が上がった子どもは、もっと手をかけないと学力が上がらなくなります。何故かというと、自分で学ぶ力を失ってしまうからです。これも日本的です。今日、保護者の方いらっしゃると思うんですけど、自分の子どもが家に帰って勉強しないと心配になります。そうやってみんながあおるからですね。子どもが勉強しないと、学校も、家庭学習時間を調査したりします。「勉強時間少ないやろ」って、子どもにいつも言う。子どもは少ない少ないと思います。いつも劣等感です、自分はできない。いつも叱られて、自分はできないという育ち方をしていて、さらに勉強時間を増やすことが目的となっていますが、実際違いますよね。本当の目的を考えたら、自分が必要な時に自分で勉強できる子どもに育ってほしいのに、時間を増やすことが目的になり、だから日本でよく使われるのが「学習習慣」です。学習習慣を付けることが大事だと学校はよく言います。本当ですかということなんですよ。今まで当たり前のように言われることが、誰も疑問に思わずに、みんな正しいと思ってみんなでそれをやっているということです。

自分で考えて自分で行動するという力を復活させる

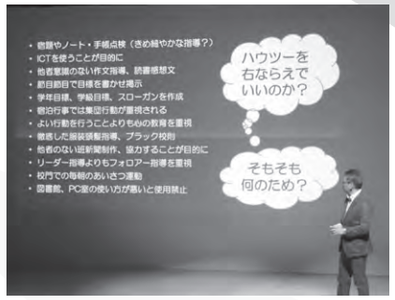
麹町中は、宿題をゼロにしましたけど、宿題は出せば出すほど子どもの自律を失わせます。それどころではありません。いろんな問題をはらんでいます。

一般的な子どもは宿題を出されると、分かる所しかやりません。分からない所は飛ばして提出します。反復して繰り返して定着させるということは除外して下さいね。この子学力上がりますか。上がらないんですよね。分からない物を分かるように、できない物をできるようにするということに注目した子どもだけが学力が上がるんですよね。塾に行って、学校と同じような授業をもう一回受けて、最初の内は上がるんですけど、なかなか上がらなくなる子どもの特徴は、いつも宿題にアップアップしていて、とにかく分かる所だけやって提出する。親は、机に向かっていることに安心する。子どもも机に向かっていることが目的になるということです。時間だけ奪われて、学力は何も変わっていないということです。

麹町中は、小学校六年間、ずっと徹底的に手をかけられた子どもたちの象徴的な姿を示しています。入学した当時ですね、麹町中の子どもたちは、本当に小学校時代から教育熱心な家庭で育っていて受験をします。中学受験です。そして失敗した子どもたちが入ってきます。約八割が受験失敗組です。勉強はもう大嫌いで、先生も嫌いで学校も嫌いだという不登校になった子どももたくさんいます。その子どもたちが三年生までに何故元気を取り戻して、何故自分で勉強ができるようになり、大幅に力を付けるのかというと、自律を常に考えているからです。自分で考えて自分で行動するという力をリハビリして復活させるんですよ。

日本の子どもたちの話に戻しますけど、とにかく指示されたこと、それをこなすだけの子どもですね。日本の労働生産性が低いと言われていますけど、ドイツは、日本の労働時間の約六割から七割で

同じ生産性をあげている国だと言われています。日本もドイツのようにならなければいけないと、国をあげて今言われています。働き方改革です。でも、できるわけがありません。何故かといったら、教育がこれだからです。教育が小・中・高校と非常に効率的ではありません。働く時間を短くして成果を上げろと言っているのに、たかだかペーパーのテストを上げるために学ぶ時間を延ばせと言っているわけですから、真逆だということですね。子ども自身がどうやったら勉強ができるようになるのかなと考える子どもになっていないと、働き方改革なんてできないということです。そんな子どもたちが大人になっているんですから、自分の会社に課題があったって、誰も解決しようとしません。いつも他人のせいにする、会社が悪い、上司が悪いから…その訓練が子どものうちからなされていないということなんですね。

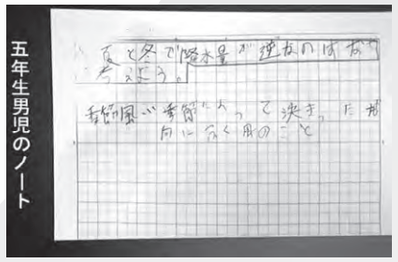


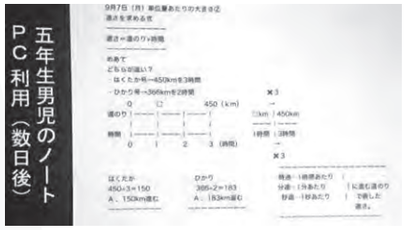
勇気をもって見直す

ここにあるのは麹町中が全部やめた物ばかりです。宿題を無くしましたけど、ノート点検や手帳点検もありません。ＩＣＴを使うことも目的になっていません。宿泊行事では、学年目標とか学級目標も作りません。あるのは学校目標だけです。学級目標を作ると、クラスによっては、「ガッツ」とかですね、よく分からない目標がありますね。みんな子どもたちはおかしくなるんです。何が目標なのか分からない、本当に目指している物ではなくてスローガンなんですよ。実現するための物ではありません。そういう習慣が子どもの頃から染みついています。ＰＤＣＡがまわせない、計画実行ができないんですよ。服装・頭髪指導もそうです。外国を見たら何も関係ないとみんな分かっているのに注意します。日本型学校教育にも良いものもあるでしょうけど、本当に見直しをする必要があります。それは、勇気を持ってです。これまでの学校教育は、明治維新以降、百五十年間変わっていません。一斉教授型ですね。カリキュラムを作って、何を何時間教えるといった計画を作り、どう教えるかを研究してきた。これからの時代は、学習者主体ですね。小学校の授業で、黒板の方をみんなが見てそろって座っている学校なんていうのは、もう日本くらいじゃないですか。学ぶ姿は、もう寺子屋ですよ。何を学んでどう学ぶかを子どもが決められるような時代に変えていくんです。

自分の将来の姿を見えるようにするのが学校

ここで、一人の障がいのある子を紹介します。今六年生です。これは彼が五年生のときに書いた授業のノートです。方眼ノートなのに字がガタガタしていますね。一時間かけてこの二行しか書けなかったんですよ。何故かというと、ノートをとる時、鉛筆で字を書くことがとても苦手だからです。必死になって書いていました。この子は、ディスレクシアという読み書きの障がいがあります。同じ障がいのある人で有名なのは、天才映画監督のスピルバーグと、役者のトムクルーズです。二人ともディスレクシアです。トムクルーズは役者ですから、台本が読めないという致命的な障がいがあるんです。でも彼は、録音して台本を覚えて演技をします。読む・書くがダメなんですけど、話す・聞くというのはとんでもなく得意なんですね。海外では、読み・書きは苦手でも、話す・聞くを伸ばす方法で、又は別の方法で勉強ができるということなんですね。

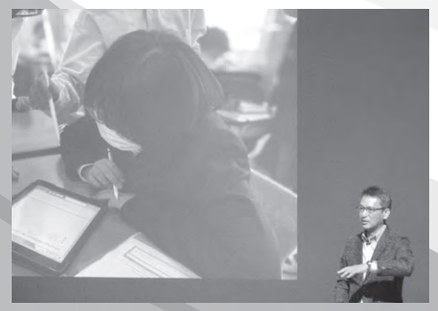




もう一回、さっきの子どもに戻しますね。この子、昨年、お父さんが心配して、ものすごい劣等感でいっぱいだった子なので診断を受けました。ディスレクシアと分かりました。そこで、校長先生に頼んでパソコンを使わせてもらうことにしました。それで数日たった時のこの子のノートがこれです。たった数日ですよ。算数のノートです。すごく喜んだそうです。あっという間に自信を付けたそうです。この子はノートをとれと言われなかったら、もしかしたら授業できたかもしれない。聞いて覚えなさいと言われたらもっとできたかもしれないですよね。日本では、未だに数学のテストで、大学受験でもそうですけど、電卓すら使えないです。海外では、電卓が使えるのは当たり前です。日本は未だに手書きで計算します。日本は、日本の学校に適応できるかが大事だと言われます。世界は、世の中に適応できるようにしてあげるのが教育だと言っています。これ、半年後の彼のノートです。ここからわずか半年ですよ。この子は自信を付けて、パソコンでノートをとることで、自分の将来の姿が見えましたよ。鉛筆では書けないけど、タブレットを打つと字が打てるんですよね。学び方というのは、実は、将来の働くスタイルですから、書いて覚えるのが得意な子がいれば、パソコンがやれる、視覚に強い子もいれば、いろんな子がいます。そういうことを学ぶ場所になっていますかという話ですね。これからは、学習者主体で、テクノロジーを上手に使って、自分の将来の姿、働く姿みたいなものを見えてくるようにしてあげるのが学校だと思います。

教育の本質を考えてコーチングする教師

麹町中は数学の時間、教材の一つに、ＡＩ型の教材を使っています。これは、算数でつまずいてしまった子にとても有効でした。先生や友達に質問するのが恥ずかしくて、それができない子どもたちを、このＡＩが助けてくれます。問題を解くと、その子の解答の間違ったパターンとか、解答までの時間を瞬時に判断して、この子が小学校時代のどこでつまずいているのかを判断して、すぐに把握してそれを提示して説明してくれるんです。このことによって小学校時代のつまずきを改善します。今、宿題もないので、問題集すら買い与えていません。子どもたちに、「何でも好きな物持っておいで。」と言うと、塾に通っている子は、塾の問題集を持ってきます。それで、分かんない問題を友達と相談したり、先生を呼びます。先生は塾の問題集を教えてあげます。普通の学校だったらどうでしょう。授業中に塾の宿題やってたら、「おまえ何やってんだよ。今やる時間じゃないじゃん。」ってなりますよね。麹町中の子どもたちは、一冊っていう問題集で勉強しているので、これで分かるか分からないかを整理して、分かんない問題を解決していこうとするわけです。これからの教師は、子どもに何のために我々は教育をしているのかということを、きちんと本質的に考えてコーチングしていくということが求められているというわけです。塾だとか学校だとか、学校が塾を敵にしていてはいけません。現実があるんだったら、現実を受け入れて子どもたちにとって何ができるのかを考えてあげる、そういうことだと思います。



［次号へ続く］

岐阜県環境生活部環境生活政策課

家庭で子どもに教えたいことや、育みたい力など、
家庭教育のヒントになる情報をお伝えします！！

みんなで家庭教育！

子育てに苦労したり、多忙だったり…。でも、子育てに夢中な時こそ、「人生の華」なのかもしれません。その苦労を大切に過ごしてみませんか。

私は、三人の子どもを授かり、父親として子育てに奮闘しながら過ごしてきました。その子ども達も結婚して、自分も定年退職で、ようやくひと休み。自分の時間ができて、旅行でもと思っていたのも束の間、今度は孫たちに囲まれ、その成長を楽しみながらの賑やかな生活が始まりました。

まさに岐阜県の家庭教育支援条例で言う「祖父母の役割」の領域です。私としては、一生懸命、孫たちと関わりを持とうとしているのですが…。

＊「布オムツを洗濯」から「紙オムツをゴミ箱」へ
＊「背中でのおんぶ紐」から「前抱き」へ
～かつては子も背中越しに親と同じ景色を見られたが今は対面ハグの推奨～
＊「乳児の皮膚はパウダーで乾燥させよう」から「ワセリン塗布による保湿が大切」へ
＊「クーハンでの車中移動」から「チャイルドシートの義務化」へ

など、「お父さん、それは昔の子育て、今の時代は違うよ。」と言われて戸惑うことばかりです。妻や二人の娘たちからは『昭和のお父さんだ。』とからかわれています。

さて、管内のある市町村で開催された「愛の絵手紙展」で、次のような作品に出会いました。作者の素敵なメッセージも添えられていました。

『子育て時代が人生の華だよ』

今も健在な祖父の言葉です。実家が自営業をしていたため、両親は朝から晩まで働いていました。

初孫だった私は穏やかに育ててもらいましたが、妹と弟が年子で生まれたころ、祖父母の孫育てはピークだったそうで「夜中じゅうポットとミルクを抱え込んで寝ていた」と言っていたほどです。

私も妹も母となり、子育て真っ最中のころ、祖父がこの言葉をハガキで贈ってくれました。孫育てをしてきた祖父のこの言葉は、何より真実味があり、大きな応援歌となっています。

祖母は「〇一才で他界しましたが、「人生これから!」と言っている祖父は今年で一〇三才。この言葉は私の宝物です。

私自身は、この祖父の方の三分の二にも満たない人生しか生きていませんが、今から振り返ってみるとまさしく『子育て時代こそ人生の華』だったのではないかとも思います。

○やっと帰宅し、わが子の寝顔に耳を近づけて、息をしていることを確かめるだけの忙しかった頃
○スポ少の応援や塾への送迎など、もっぱらタクシー運転手の役割に徹した頃
○高校や大学受験では、子どもとともに、進路選択で悩んだ末には、学費や下宿代の捻出
○子ども達が結婚し、今ではそれぞれがマイホームの計画

ハードな日程の中で、その時々において、わが子へ精いっぱい密な関わり方をしてきたつもりです。知らぬ間に〝人生の華〟を味わっていたのでしょうか。

つい先日、ラジオを聞いていると母親であるパーソナリティーから「自分の子どもの成長を通して、子どもの数だけ、人生をもう一度、再体験できる。」という趣旨の話を聞いて、なるほどなと思いました。

平成二十三年の総務省統計局の社会生活基本調査のデータをもとに計算してみると、生涯でわが子と一緒に過ごす時間は、高校卒業までに、父親はわずか三年四か月、母親でも七年六か月になるそうです。この短い時間こそ、親として自分の生きざまを示し、子どもの生き方の基礎を培う大事な時かもしれません。

子育てに正解や定型はないと思っています。「家庭で子どもに教えたいことや育みたい力」などというおこがましいことは言えません。しかし、親としては、その子、その子に応じて、子どもの将来の最大限の幸せを願って、その時、その場の最善を尽くすことが何より大切だと思うのです。

子育てに苦労したり、多忙だったり…、本当に大変な毎日だと思います。でも子育てに夢中な時こそ、人生の華なのかもしれません。その苦労を大切に感じながら過ごしてみませんか。

可茂県事務所 家庭教育推進専門職
鈴木 淳司

先生！ありがとう！

～保護者から先生へ贈る感謝の四〇〇字メッセージ～

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で休校が決まり、政府からの要請から実施までわずかな日数のなか、教育現場は本当に大変だったと思います。

昨年度はコロナ禍でも感染対策をしっかりとした上で、体育祭を実施していただきました。今年度も体育祭を中止にはしたくない！とのことで、例年まで秋に開催されていた体育祭を春に予定してくださり、春に出来なくても中止ではなく延期にできるよう、子どもたちの想いを第一に考えてくださっています。

感染のリスクを伴う合唱祭も中止にするのではなく、手拍子での発表とし、子どもたちも合唱とは違う楽しさを感じられたと思います。

また昨年度の修学旅行や宿泊研修では、研修先を県内へ変更し、岐阜県の良いところを子どもはもちろん、保護者も再確認できました。

まだまだたくさんありますが、子どもたちの安全・想いを第一に、常に諦めない選択をしてくださる木股校長先生をはじめ、小泉中学校の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

小泉中学校の先生！ありがとう！

（安江 美沙紀・多治見市立小泉中学校PTA会長）

information

■作品を募集しています。

イラスト・なぞなぞ・逆さ言葉などの作品を募集しています。イラスト・絵手紙はハガキの裏面に描いてお送りください。ペンネームを使う場合にも、郵便番号、住所、学年と氏名を表面に記載してください。なぞなぞ・逆さ言葉は「親子ではてな」の回答とともにお送りください。

宛先はいずれも　〒500−8816 岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内「岐阜県PTA連合会・作品係」まで

採用の方にはお礼をさしあげます。

■本誌の購読について

本誌は年間5回発行（7・9・11・1・3月）されます。年度初め（4～5月）と7月の2回、各学校PTAを通じて購読募集を行います（1冊200円、5冊1,000円）が、年度途中でもお求めいただけます。学校または県PTA事務局へお問い合わせください。

■11月号のお知らせ（予告）

特集=定期大会講演「社会の変化とこれからの子育て（後編）」／表紙=那加第二小／学校のたからもの=大桑小・宇留生小・明宝小・青山中／わが家の宝物=兼山小／リレーエッセイ／みんなで家庭教育／みんな、いっしょに／保健室ノート=福岡中／私の先生=萩原南中／子育て半生記=鵜沼第一小／楽しい読み聞かせ=西小／親の背中=土岐小・巣南中／1冊の本=梅林小・東部中／わが家の約束=牧谷小・桑原学園／子の思い=坂祝小・飯地小・朝日中／親の願い=岐阜小・西部中／教育の窓=精華小・川島中／先生!ありがとう!=藍川北中／お試しクッキング／ふるさとの伝承=南小／きらり!キッズ!=洞戸小／夢中!熱中!我らが部活=本巣中／私たちのPTA=今渡北小

【多様性尊重の教育⑳】シリーズ

みんな、いっしょに

久しぶりに大学で出会ったA君

岐阜聖徳学園大学教育学部特別支援教育専修 教授　安田 和夫

交流および共同学習のひとこま

今から十年近く前のことです。大垣市内のある小学校を訪問しました。その小学校には、毎週金曜日、岐阜盲学校から、交流および共同学習に来ている児童がいるとの情報を受けて、ぜひ、この取り組みを紹介し、県内に広めていきたいと思ったからでした。

参観したのは、算数の授業でしたが、弱視であるA君は、一番前の席で落ち着いて勉強していました。単眼鏡を巧みに使いながら板書を見たり、書見台に拡大教科書をおいて目を近づけ確認したり、授業を楽しそうに受けていました。周囲の仲間もいつもと変わらない姿でともに学んでいました。授業後、A君は「小学校の授業は楽しい。みんなのいろいろな意見を聞くことができて、いろいろな解き方があることもわかり、わくわくする。」と語ってくれました。

A君との再会

そのA君と、十年ぶりに出会うことができました。それも私の勤務する大学で、新入生と大学教員として再会したのです。

私は、大学の中で、教育学部教員としてだけではなく、学生支援センター長として、障がいや病気などのある学生の支援を担当しています。受験時から、A君の入試実施上の合理的配慮を検討したり、岐阜盲学校の先生方とともにA君とも何回かお会いしたりしていましたが、「十年前のA君」とは結びつきませんでした。

入学後、A君と、大学における合理的配慮申請や、教科書や教材の相談を繰り返す中で、「えっ、君って、ひょっとしたら○○小学校だった?」「はい、そうですけど。」「えっ、ということは、あの時の『A君』なの!」と、入学後、半月経ってからようやく気づきました。本当にびっくりです。当たり前のことですが、初対面だった小学生の時と比べ、体も大きくなり、見違えるほどです。

A君本人は、十年前の私のことも、インタビューのことも覚えていませんでした。しかし、参観させていただいた算数の授業の様子や、その後のインタビューのやりとりを話すと、「そうだったのですね。」「そんなことを話していたのですね。」と、懐かしそうに話してくれました。彼は、今、得意な外国語を中心に学んでいます。夢と希望に満ちあふれた素敵な青年に成長しています。

いつも感心するのは、礼儀が正しく、言葉遣いもていねいで、気持ちのよい対応ができることです。弱視のため、目の前に人がいることはわかっても、ぼんやりとしか見えていないようです。しかし、こちらから「A君、元気?」と声をかけると、声ですぐわかるようで「安田先生!こんにちは。」と、気持ちのよいあいさつを交わしてくれます。また、空き時間になると、時間を惜しむように、授業の予習や復習に取り組んでいます。人一倍、時間をかけて、学習内容の修得をめざしている姿は感動します。

現在、本学には、こうした視覚障がいのある学生が三名、また、聴覚障がいのある学生も三名学んでいます。その他、難病、発達障がい、精神疾患など、様々な困難な状況を抱えている学生が、それぞれに必要な合理的配慮を受けながら、精一杯、大学生活を充実させています。そして、それぞれの自立と社会参加をめざして、毎日毎日を大切に過ごしているのです。

コロナ禍における学生達

ただ、二年越しのコロナ禍にあって、こうした学生達の多くは大変苦労しています。

重症化リスクがあるために、大学へ来ることそのものに制約がある難病の学生もいます。マスクをかけているために口の形が読み取れず、孤立感を深める聴覚障がいのある学生もいます。また、リモート授業が増えることに伴い、レポート課題が増えたため、優先順位がつけられず、どんどん溜まり、未提出のまま〆切が過ぎて、成績にも影響が出てくる学生もいます。

A君については、入学前に本人立ち会いの上で学内環境調査を行い、段差や動線の安全確保などハード整備を進めるとともに、授業での合理的配慮を進めているところですが、コロナ禍においてリモート授業における情報保障やレポート課題等の管理が十分できているかどうか、大学としてもまだまだ検証の余地があると感じています。

学生支援の主役は、学生本人

ただ、こうしたコロナ禍においても、主役は「学生本人」であることを忘れてはならないと考えています。学生本人が自らの課題や困難さを自覚し、どうありたいのか、どのような支援や配慮があれば実力が発揮しやすくなるのか、積極的に申告をしていく力を育んでいくことができるようにサポートしていきたいと考えています。

自分の権利を守るために、自分の要望を周囲に積極的に伝えていくことを「セルフアドボカシー」といいます。日本語に訳すと「自己権利擁護」と表現されますが、障がいや困難のある当事者が、自己理解の上に立って、周囲との関係性を作っていき、自分の利益や欲求、意思、権利などを、自分から周囲にわかりやすく伝えていく力が、自立と社会参加には必要だからです。

先日も、定期考査が予定されている授業について聞き取り、試験時間の延長など、本人に必要な支援をひとつひとつ確認していきました。周囲が「よかれ」と思って、本人のいない中で決めてしまう支援は「おせっかい」となることもあり、人権を侵害していることともいえます。

これまで、障がいのある人たちは、「支援を受ける対象」として、常に、受け身の存在として取り扱われた時代が続きました。しかし、現在、障がいのある方達が「自分自身のことは自分で決める」と、自己選択・自己決定の権利を強く主張する場面が増えてきました。このことは、障害者権利条約の中でも「基本的人権」として位置づけられています。

障がいや疾病の有無にかかわらず、すべての学生が、コロナ禍を嘆くばかりでなく、未来を切り開いていくたくましさやしなやかさを身につけていってほしいと願い、今日も学生一人ひとりと向き合っています。

保健室ノート

コロナ禍で学んだことを活かしたい

各務原市立稲羽東小学校
養護教諭
平林 里美

「先生、二時間目ぐらいから頭が痛いです。」

「大丈夫？普段の平熱ってどれくらいかわかる？」

「だいたい、いつもサンジュウロクテンヨン度ぐらいだと思うけど…。」

「そっか。じゃあ測ってみようか。」

毎日多くの学校で同じようなやりとりがなされていることと思います。しかし、今までとは、何かが違います。

新型コロナウイルス感染拡大防止のために始まった健康チェックカード。記入し始めてから早一年が経ちました。毎日の体温測定のお陰で、今まで自分の体温に全く関心のなかった児童たちが、自分の平熱を即座に答えることができるようになりました。このことは、養護教諭が児童の体調を見極めるのに大いに役立っています。また、児童自身が自分の体の様子を知ることは、自分自身を守ることにも繋がっていくと信じています。

本校は、児童数百四十人の小規模校です。各務原市の南部、木曽川の北岸に沿って細長く広がる自然豊かなところです。校区には、航空宇宙博物館、川崎重工ホッケースタジアム等の施設があります。

伝統行事として、明治時代から行われている茶摘みがあります。残念ながら茶摘みは、コロナの影響で二年連続中止となりました。しかし、六年生の児童たちは、茶摘みの歴史を丁寧に調べ、下学年に分かりやすく伝えることで更に深い学びが出来たようです。

児童は、素直で明るく、休み時間は外に出て積極的に体を動かして遊んでいます。ところが、コロナ後は、教室で過ごす時間が増え、体格にも影響が現れてきました。昨年度六月の肥満度の状況は、前年度のそれと比較すると肥満傾向の児童の割合が二倍に増加しました。明らかに運動量が減少したためです。学校再開後から現在まで、今でも以前の体格には戻っていません。休み時間に外へ出て体を動かすことは、成長期に欠かすことのできない運動タイムであると言えます。また、最近では、陽の光を浴びることが近視抑制にも効果的であると言われています。

毎日の手洗いタイムは一日三回。消毒までしっかりと行っています。勿論、ハンカチ調べも毎朝、学級でチェックしています。コロナ前と比べると、ハンカチを身に付けてくる児童が増えたことは嬉しい限りです。時には必要に迫られることも、大切なことであると実感しました。

教室内における換気は、特に冬期が心配でした。積極的に窓を開けなくなるからです。そのため、保健委員会の児童がトイレットペーパーの芯を利用した〝かんきくん〟を作成し、窓枠に挟んで呼び掛けてくれました。どれくらい開けたらよいのかがわかりやすく、目を引くので意識が高まったのではないかと思っています。

給食は、教室に余裕があるため、在籍数の多い二学年のみ現在も分散給食を行っています。『最後の一人がマスクをつけるまで思いやりをもとう』を合言葉に黙食が徹底されています。誰一人喋る児童はいません。心を落ち着けて食事を摂ることが出来るので、消化にも良いです。また、保健委員会の献立紹介や他の委員会からのお知らせ等、しっかり放送を聴くことができています。

こうしてコロナ禍の一年を振り返ってみると、児童自身が基本的な生活習慣を身に付けることができたことが一番嬉しいことです。また、日常の取り組みが如何に重要であったかを改めて知ることもできました。

ＩＴの進化とともに学校生活も今後ますます変化していきます。変化に戸惑いながらも、コロナ禍で学んだことを、今後の教育活動に活かしていきたいと思います。

校庭の茶葉

礎となったできごと

岐阜市立岐阜特別支援学校
教諭　辻 香子

「土曜日にカレーハウスを行います。」

中学校の特別支援学級の担任として赴任してすぐのことでした。隣の学級のN先生が生活単元学習で行う、カレーハウスの話をされました。教職員からカレーライスの注文を取り、土曜日に授業があるときに販売するという学習活動で、二年間積み重ねてきたものだと教えてもらいました。

まず自分が分担する材料を人数分買うところからスタートしました。前日の金曜日、生徒たちはもう何度もやっている学習なので、人数分の材料を計算してからスーパーマーケットに行くと、さっと売り場に向かい自分で買っていました。土曜日の午前中、買ってきた材料を切りました。私が驚いたのは生徒たちが、見事に玉ねぎをみじん切りにしていたことです。継続することで、こんなスキルが身に付くことを知りました。

いよいよカレーハウスの開店です。生徒たちは来店した先生方に、出来立てのカレーをはりきって持っていきました。

「ありがとう。おいしいよ。」

と先生に言われ、それまで見たことがないようなうれしそうな顔で、

「ありがとうございます。」

と答える姿や、誇らしげに戻ってくる姿を見て、この活動を通して自己有用感が育っていることも感じることができました。

以前勤務した学校では、生活単元学習で畑作業に取り組んでいましたが、カレーハウスの学習に出会って、いろいろな教科の学習を取り入れて行うことのよさを知りました。カレー作りを核にして、さらにどんなことができそうか、生徒たちとアイデアを出し合いました。おそろいのエプロンを作ること、デザートをつけること、飲み物を置くコースターを作りたいな、など生徒たちの願いはどんどん広がっていきました。その都度、N先生にアドバイスをいただきながら、生徒たちと考えたアイデアを形にしていくことがとても楽しく、充実した毎日を送ることができました。そして、特別支援教育に携わっていきたいという思いをもつようになりました。

それからしばらくして、小学校四年生を担任しました。その学級に、四年生になって転入し、一人でトイレに行くことを苦手としている児童がいました。入口で立ちすくんでしまうその子に、どんなことを話すとできるようになるのか悩み、学年の先生に相談しました。そこで紹介されたのがS先生です。特別支援教育の専門家としていろいろな学校を巡り、指導をしてくださっていることを知り、来ていただくことにしました。授業の中での様子を見ていただいた後、S先生は

「初めてのことは苦手かもしれないね。保護者の人が了解してくださったら、検査するといいと思う。」

と言われました。それを聞き、確かに初めてのことに対して「どうしたらいいの。」という発言が多かったことを思い出しました。検査の結果、やはり初めての場所や初めてのことは苦手であることが分かりました。トイレに一人で行けないのではなく、転校前の学校や、家のトイレと違うトイレだったことから、とまどっていたのです。入り方をやって見せ、同じようにやってみるよう言葉をかけて少しずつやってみたら、出来るようになりました。それから、初めての活動などで、丁寧に説明するなどの工夫を加えると、スムーズに活動出来る姿を見て、専門性を高めること、特に特別支援教育の分野の勉強をしたいという思いが強くなりました。

その後、特別支援学校に勤務する機会を得て、学んだことを実践しながら、新しい発見や気付きのある毎日を送っています。まだまだ生徒たちや周りの先輩や同僚から教えてもらうことがたくさんありますが、そのことに感謝しながら、さらに深く学んでいきたいと思っています。

多治見市立市之倉小学校 PTA会長　水澤 賢一朗

わが家の宝物

わが家の宝物は何だろうかと考えながら、アルバムを開いたり家族からプレゼントされた物などを眺めていると、頭に常に浮かんでいるのは二人の子どもたちの姿でした。

私には八歳の息子と五歳の娘がいます。のんびりした性格のお兄ちゃんと活発な妹で、お兄ちゃんはいつも手を焼いているようですが、とても仲良しで家庭内はいつでも賑やかです。

そんな二人は料理のお手伝いが大好きで、我先にとキッチンにお手伝いに来る姿がよく見られます。妹が包丁を握る姿をヒヤヒヤしながら見ながらも、アドバイスをしてあげるお兄ちゃん。そんな姿をヒヤヒヤしながら見守る私たち夫婦。少しずつ上達する姿には目を見張るものがあります。楽しんで料理しているおかげか子どもたちは好き嫌いがほとんど無く、特に自分たちが手伝った料理はあっという間に完食してしまいます。このままよく食べ、健やかに育ってくれればと願う毎日です。

二人とも性格がまるで違うので、時にはケンカになる時もあります。つい口を挟んでしまいますが、最近は譲るということを覚え、二人で上手く解決する姿も見られるようになってきました。いつも譲るのはお兄ちゃんですが、今はその関係が丁度良いのだろうと温かく見守っていこうと思います。

そんなわが家の宝物の二人、これからの更なる成長に期待が膨らみます。

リレーエッセイ 15

つながりノはじまり

岐阜市立陽南中学校ＰＴＡ
辻 智秀

「オン　ユア　マーク」
これ？分かりますか??
運動会、体育大会のかけっこ、徒競走で皆が耳にした緊張の一瞬、はい、その「位置について」です。
現在の陸上競技は世界共通の合図になり、日本でも英語スタートになりました。
私自身も長く陸上人生を経験し、色々なご縁で今の陽南中陸上部コーチになり、今や七年目になりました。
今年はうちの坊主も入部してきました。正直、坊主は一番ではナイですが走る楽しさを心得ているので、今はそっと見守ろうと思います（いつか、爆発してくれるのを祈って）。
約三十人の部員と一緒にトレーニングに励んでいます。選手それぞれにあった種目に挑戦し、個々にあった練習メニューを作成します。
一番、練習で盛り上がるのは、最後の総仕上げ、全力走！いわゆるリレーです。人数調整で僕も参加するのですが、僕自身もシニアの試合に出場しているので、まだまだ負けませんよ（自分だけがそう思っているだけかも…）。
散々、練習した後の全力走。辛いですが、全選手が負けずに、歯を食いしばって、次の選手へとバトンを繋げます。
時には悔しくて、「もうっ一本っ」のコールが響き渡ることも、うれしい悲鳴です。勿論「おかわり」は受け付けますよ。
練習後、選手のやりきった爽快感の笑顔はたまりません。そして、その笑顔は、また次の走りへと前進していくのです。
選手は、それぞれいろいろな悩みと戦っています。笑い合ったり、励まし合ったり、たまにぶつかることもあるけど、前に進めることも…。
こんな時代が教えてくれた、繋がる大切さ、かけがえのなさ。
さぁ皆さん、各々の岐路へ突き進みましょう。では、いきますよ～
「オン　ユア　マーク！」

次回は… 山県市立高富中学校ＰＴＡ　市原 善典さん

子育て半生記

球育

海津市立東江小学校 PTA会長　菱田 宗宏

子育て半生記の原稿執筆にあたり、子育てについて少し考える機会を与えて頂いたように思う。

私には十四歳の娘二人と十歳の息子の三人の子どもがいる。子育てを十四年したことになるのだが、何か特別なことをしてきた感じは全くない。一緒に生活をする中で私自身が経験してきたことを伝えてきた。ただそれだけのように思う。親が手本となり、親の考え方によって子どもは成長することになるということだろう。一番子どもに影響を与える存在であるということ。今、そんな風に感じている。

子ども達に何をしてきたのか。朝のあいさつ「おはよう」何かしてくれたら「ありがとう」悪いことをしたら「ごめんなさい」など、小さい頃は誰でも経験したことのある声がけである。少し大きくなってくると「嘘はつかない」「正直である」「努力する」「素直になる」「最後まで頑張る」「感謝する」など、よく小学校などで聞くようなことを伝えてきた。私も今までの人生の中で何度も聞いてきた言葉である。更に成長すれば「謙虚」「公正」「誠意」などになってくるのだろう。小学校の道徳の授業に近いものがあるかもしれない。

人生の半分を過ぎる年齢になり、日々働く中で感じていることは、小学校の頃に教えて頂いた道徳や倫理こそが重要であり、正しいことと間違っていることを判断できる人、正しい方へ導ける人が求められている。そう考えると幼少期の教育は人の礎でありとても大切なものだと改めて思う。

三年前、息子が野球をやりたいと言い始めた。小学二年生の冬である。理由を聞けば友達がやっているから…。小学校区にあるスポーツ少年団である。私もかつてスポーツ少年団に入団したことがあるが直ぐに辞めた経緯がある。野球について知識がない上に私自身全く興味のないスポーツであったが、息子の熱意に負け渋々体験入部へ行ってみると、そこには自分の後輩が監督として野球を指導している姿があった。子どもが少ない上に野球人口が減ってきているため数年前に小学校二チームが合併したクラブである。

息子と二人でベンチに座り練習風景を見ていると、ものすごい声量で厳しい指導をしている。我々が学生時代にやってきた部活動に近いような雰囲気で懐かしさを感じた。息子に「厳しい感じだけどやれそう?」と尋ねると「無理」の一言。私の膝から離れない。今まで他人に大きな声で叱られたことなどないから当然とも言える。私は息子と逆で、こんな厳しさがあるならやらせてもいいな、きっといい経験ができるに違いないと思った。こうして息子の野球人生がスタートした。キャンプへ行ったりスキーへ行ったりする週末は諦め、我が家は野球漬けの週末へと変わった。

野球未経験の私はルールやバッティング指導など、本やＹｏｕＴｕｂｅで学び息子との練習が始まった。

小学二年生の子どもに教える難しさと親子であるが故にうまく行かないことなど壁にぶち当たった。監督やコーチ、他の保護者の言うことはよく聞き、子どもに係わる全ての人に子育てをしてもらっている。

私もすっかり野球にハマりある一冊の本に出会った。「球育」という本だ。野球技術の指導本ではない。この本では野球に対する心構えが書かれている。心構え＝心が前と書いている。また、親や指導者が主人公の野球になっていないか。子どもが自分で考える機会を邪魔していないか。野球を通じて「考動力」を鍛えることで社会に出てから役に立つ考え方が記されている。

本書の中で特に感銘を受けたところを紹介したい。

野球が養ってくれる「人間力」と呼ばれる五つの力、野球を終えて子どもたちの今後に必要な力は、野球で養った「目に見えない力」が「人間力」である。

①全ては気付きの力

気付くとは「気が付く」ということ。自分の気持ちがあるものに付くもの。仲間が困っていて助けようと思うことも自分の気持ちが「仲間に付くこと」ができるかどうか。親や指導者に「感謝」することに自分の心が気付けるかどうか。

②やり遂げる力

「野球を楽しく」と言われるが、本当の楽しさを得るためには厳しい練習があってこそ。その厳しい練習も含めて「野球は楽しいもの」である。最後までやり遂げることによって「自信」という将来に役立つものを手にいれることができる。

③仲間を想い遣る力

野球はチームである団体スポーツ。チームの中の一人に属することになる。将来、社会人になったら「会社」というチームに属する。結婚すれば「家族」というチームができる。人間は一人では生きて行けず、必ず何らかのチームに属することになる。チームの中には必ず困っている人がいる。仲間を想い遣る力が役に立つ。

④自ら考え動く力

野球をしていると様々な場面で「判断する力」が必要になってくる。プレー中、瞬時に自分で判断するためには、普段から「自分で考え行動する力＝考動力」が備わってなければならない。大人が全て指示を出したり、手を差し伸べると子どもの「考動力」は養われない。野球で養った「考動力」は「判断力」となり将来役に立つ。

⑤感謝する力

野球は一人ではできない。一緒に汗を流した仲間やサポートしてくれた保護者や指導者の力があってこそ子ども達は野球をやり遂げることができる。その「謝意を心から感じる」という力を得た選手達は、有難みの本当の意味を知ることができる。その力は優しさを持った証でもある。

野球を終えてから、何か一つでも野球を通じて身に付けた「心で感じる力」が残っていてくれたら「人間力」となるはずだ。

今、息子は小学五年生。まだまだ野球のスタートラインに立ったばかりである。野球を始めた時に立てた目標は「目指せ全国大会！」

一緒に野球に打ち込める今が一番幸せな時だと感じている。

息子と一緒に私も成長して行きたい。

Illustration&Quiz
イラスト&クイズ

PN.アヤ（大垣市）

PN.フランシス（羽島市）

question 1

出題・堀 希実（岐南町）
〈答えは41ページ〉

大人がひさしぶりにお菓子を買いました。さて、買った季節は、春・夏・秋・冬のいつでしょうか？

楽しい読み聞かせ 14

「読み聞かせ」で子どもたちに喜びを

郡上市立相生小学校ＰＴＡ

本校は、郡上市の中央に位置し、「郡上八幡」の南にあります。校区には長良川やその支流の亀尾島川が流れており、自然に恵まれた地域です。校区の住民は、ＰＴＡ活動をはじめ、公民館活動等の地域活動に積極的に参加し取り組む人が多く、学校の教育活動にも、とても協力的です。

本校では、これまで読み聞かせを、児童会活動と、「おはなしばたけ」（市内で読み聞かせ活動を行っている団体）によって行っていました。図書委員会では、全校児童に本の面白さを知って喜んでもらいたいと、読み聞かせを行っていました。四年生から六年生までの委員が、六つのグループに別れ、お勧めの本の読み聞かせを昼休みに各学年の教室で行っていました。

また、「おはなしばたけ」の皆さんには、年に一度行っていただいていました。各学年に応じた本を選び、エプロンシアターなどの工夫をして、子どもたちをひきつけてくださいました。子どもたちも、とても楽しみにしていました。しかし、昨年の三月からの新型コロナウイルス感染症拡大防止による学校休校等により、これらの読み聞かせ活動はできなくなりました。

その一方で昨年度、相生小「図書館情報センター」運営委員会が本校にできました。学校とＰＴＡが運営し、児童が使いやすい図書館をめざしました。郡上市図書館の「移動図書」の貸出ボランティア活動を行っている保護者が中心となり、活動を始めました。図書館の運営や環境整備の協力をしていただきました。そんな話し合いの中で、保護者の方たちによる読み聞かせを実施しようという動きがありました。コロナ感染が収まり始めた四月には、実際に活動が始まりました。まず、自主的に市の図書館から本を借り、読み聞かせの練習を行ってきました。そして、六月には、一回目の読み聞かせを実施することができました。

今回の読み聞かせでは、「たまごにいちゃん」と「にじいろのしまうま」の大型絵本の読み聞かせを行いました。本選びでは、対象を低学年にしたので、「本は楽しい」と思ってもらえるよう、絵が鮮やかな本で子どもたちに馴染みのある人が作った本がよいとなりました。そこで、ＮＨＫの「はなかっぱ」の作者の本と、アンパンマンの作絵で、助け合いをテーマとした本をそれぞれ選びました。

また、子どもたちが飽きないようにと、一人で読むのではなく、それぞれの配役を決めて読むことにしました。十人のメンバーが全員参加し、配役を決めました。各自が家で練習をし、学校へ何度か足を運んで、メンバーみんなで練習しました。リハーサルも何回か行いました。読む早さや声の出し方、色々意見を出し合いながら確認し合いました。練習に熱が入って、昼食を取らないで一時過ぎまでリハーサルをする日もありました。その甲斐があって本番では、読み始める前、ちょっとガヤガヤしていた小さな子が、読み聞かせが始まると、急にシーンと真剣な眼差しになり、終わった後は「ありがとう」や「面白かった」との声が自然に出ていました。どんな反応が返ってくるのか不安な中、とても嬉しく思える一時でした。読みながら、子どもたちの真剣な顔を見ることができたのも、とても嬉しかったです。コロナで学校の様子が見えにくい今ですが、少しでも子ども達の学校での表情を垣間見ることができました。今回の読み聞かせを行ったことで、子どもたちの本への興味が大変大きいことが分かりました。親が本に興味をもつと、子どもも本を好きになると思います。

今度は、高学年の読み聞かせを行い、子どもたちが絵本を好きになれるよう、心が豊かになってくれるよう、活動を続けていきたいと思います。

親の背中 ⑨

親の背中

本巣市立彈正小学校
ＰＴＡ会長　窪田 佳奈

親になって今年で十二年。我が家の三人の子どもたちは六年生、四年生、一年生と、今年は全員小学校に通っています。

共働きの我が家、平日は慌ただしい毎日。夫が朝ごはんを作ってくれている間に洗濯を干し、子どもたちの身支度の手伝いに検温と、あっという間に登校時間になります。子どもたちを送り出し、自分たちもそれぞれ職場に向かい、帰宅後は「お腹すいたー！晩ごはんなにー？」の可愛い声に励まされながら、焼くだけ、炒めるだけの簡単なおかずを作り、ごはんを食べながら今日学校であったことを三人分同時進行で聞き、末っ子の音読や計算カードをＢＧＭに後片付けし、三人分のプリントに目を通しながら寝落ち…。こうして文字にしてみると、何と落ち着きのない日々を過ごしているのかと改めて実感し、もう笑うしかないといったところです。

そんな感じで毎日をやり過ごし、子どもたちのことはおろか、家のことや自分のことすら満足に出来ない私の背中を見てか、子どもたちは大きくなるにつれ自分のことは自分でするようになってきました。まさに反面教師。ここまで書いていて、褒められるところが全くない私の子育てですが、ひとつだけ大切にしていることがあります。それは、寝る前に一緒に本を読むこと。絵本でもマンガでも、どんな本でもいいのです。フルタイムで仕事をしている以上、どうしても一緒に過ごせる時間は短くなってしまうけれど、ほんの十分でもしっかり向き合ってあげる時間があることで、子どもたちも私も、また明日から頑張ろうって思えます。

この「寝る前に本」のルーツは、私が子どもの頃にさかのぼります。私の母も、幼い私と弟に毎晩絵本を読んでくれました。思春期になってからは、絵本を読む時間はちょっとした悩み相談のような時間に変わりましたが、そんなふうにいつも私たちにそっと寄り添ってくれていた両親の影響は大きく、親になった今もなお、大きな愛情を感じます。

初めての出産を控えた春の日、なかなか産まれる気配のないおなかを抱え、のんびり構えていた私に、「心配やわ」と一言。「初孫だし、元気に産まれてくれると良いよね」と答えると、「それはもちろんそうだけど、私はあんたの身体が一番心配。」と涙ぐむ母の姿。あぁ、私は一生この人にはかなわない。自分よりも大切だと言い切れる、母にとって自分がそんな存在で、それがどんなに幸せなことか、親になる前に気づかせてもらいました。

誰よりも孫の成長を楽しみにしてくれていた母ですが、三年前に病気でこの世を去りました。当たり前のようにそばに居て、いつまでも見守ってくれるものだと思い込んでいた母がいなくなり、こころにぽっかり空いた穴は、今も消えることはありません。親と子が一緒にいられる時間には限りがあるものなのだと最後に身をもって教えてくれた母の想いを胸に、これからも、子どもたちと笑ったり、怒ったり、泣いたり、喜んだりしながら、未熟な背中を追いかけてもらえるように、一緒に成長していきたいなと思います。

子どもの一歩先を行く子育て

御嵩町立上之郷中学校
ＰＴＡ　大澤 ゆかり

私がいつも心がけているのは、子どもの一歩先を行く子育てです。

娘が保育園に通い始め、時間を意識する生活になった頃、毎朝二階で眠っている娘を起こして準備させるのに苦労しました。何度呼んでも起きてこない娘にイライラ。娘もそんな私を見て不機嫌。朝から、二人して気分が悪い。そして、気分が悪いまま子どもを保育園に送り出す。そんな日々が続いていた時に、たまたま読んだ育児書に同じ悩みが書かれていました。そこには、「何度も呼ぶより、そばまで行って布団をはがし、抱きしめた方が早い。」なるほど…と思い、翌朝から、二階の階段の一番上の段に座り、

「ポッポー。二階発一階行き、お母さんのおんぶ列車出発しまーす。ポッポー。」

と、声をかけると、娘は飛び起きてきて、私の背中に飛びついてきました。一発です。昨日までのあの苦労はなんだったのでしょう。

子どもは楽しい事が好き。そんな単純な事に気が付いた時、心の中で悶々としていた上手くいかない子育ての霧が晴れたような気がしたのを覚えています。

子どもを動かすには、子どもの一歩先を行き、「嫌」を「楽しい」に置き換えてやる方法を考える。例えば、小学校の低学年では、何時間もかかって嫌々やっていた宿題を、キッチンタイマーを使い、「一問一分でできるかな？五問を五分で出来たら一分間好きなことをしよう！」とゲーム感覚で子どもに付き合えば、二十問の計算ドリルもあっという間に終わります。早く早くと急かすより、楽しんで宿題を早く終わらせることができました。いつの間にか、私のイライラが減り、子どもも癇癪を起こすことが少なくなりました。

子どもの一歩先を歩く私の背中を追い、後ろをついてきた娘ですが、中学生にもなるとどんどん私に追いつき追い越しているのを感じます。追いかけっこで追いつけなくなり、身長も抜かれ、勉強も私では教えることができなくなりました。知識も増え、私にはない感性に驚かされることも多くなりました。手がかからなくなり楽になったことは、嬉しいような、また、少し寂しいような。複雑な気持ちです。

私の後ろを歩いてきた娘よ。これからは、お母さんを追い越し、お母さんの前を堂々と進んでいってください。あなたの前には、たくさんの道があります。でも、これからは自分でどの道を進んでいくのか決めなければなりません。自分で選択するからこそ、そこに責任をもち、楽しみを見出し、努力できるのだと思います。もしも、不安になって振り返った時には、必ずお母さんはあなたの後ろにいて、あなたの背中を見ていますよ。安心して前に進んでください。それが、お母さんの願いです。

十五少年漂流記

著者：ジュール・ヴェルヌ
出版社：新潮社

恵那市立山岡小学校ＰＴＡ会長　樋田 真也

私は子どものころから本が好きで、大人になった今でも本を読んでいます。

本が好きになったきっかけは、小学二年時の担任の先生が毎日一時間目に児童文学の物語をたくさん読み聞かせてくれたことです。先生の読んでくれる物語はどれも新鮮でおもしろく、とても楽しみにしていました。特に冒険ものはドキドキ、ワクワクしながら聞いていた覚えがあります。

そのなかで最も印象的でおもしろかった物語が「十五少年漂流記」でした。この物語は私たち世代の誰もが読んだり、聞いたりしたことがある有名な作品ですが、私はそのおもしろさに魅了された一人です。

今日に至るまで何度も読み返し、我が子にも読み聞かせをするほど好きな「十五少年漂流記」を「私が出会った1冊の本」として紹介させていただきます。

「十五少年漂流記」は八歳から十四歳の十五人の少年たちを乗せた船が嵐で大荒れの海を漂流する場面から始まり、流れ着いた無人島で二年間を過ごし、帰還するまでの物語です。

物語の魅力のひとつは、無人島に名前をつけたり、リーダーを決める選挙を行ったり、ルールや役割分担を決めたりと、少年たちが自分たちで国を築いていこうとする点です。

また、生きていくために住める場所の探索、道具作り、狩猟や釣りでの食料調達、年少者への配慮や安全の確保、冬の防寒対策、猛獣や殺人犯との闘いなど、様々な課題やトラブルを乗り越えていく点、対立や仲間割れ、罪の告白を経て、十五人の少年が友情と信頼関係を深めていく点も大きな魅力です。

さらに、個性豊かな登場人物や動物もこの物語のおもしろさであり、それぞれの特技や知識を活用しながら、より良い無人島生活を作り上げていきます。なかには大人顔負けの知識を持っていたり、銃の名手であったり、どんな食材でもおいしく料理する少年がいるなど、登場人物も読む側の心をガッチリ掴んでくれます。

数年前に大人向けに訳された「十五少年漂流記」が発刊されていますので、少年たちと一緒に無人島生活を体験してはいかがでしょうか。

最後になりますが、なぜ大人になった今でも「十五少年漂流記」が好きなのか。

私は自然豊かな地域に生まれ育ったこともあり、子どものころから、自然や野外が主戦場でした。近所の友だちとの遊びも探検や洞窟への潜入、秘密基地、山で昆虫採集、川では魚釣りをしていました。竹や木を切って、凧や弓矢も自作、自生するアケビやカキを食べたり、よく怒られる近所のおじさんと争ったり、マムシや蜂に遭遇したりと、まるで「十五少年漂流記」の少年たちと同じような体験をしながらスリリングな毎日を過ごしていました。

大人になった今も「十五少年漂流記」を読むと、少年時代に友だちと自然の中で遊んだことを思い出し、懐かしく感じます。よし、週末はクワガタつかみにいこう！

はてしない物語

著者：ミヒャエル・エンデ
出版社：岩波書店

飛騨市立古川中学校ＰＴＡ　沖野 真紀

私が子どものころを振り返った時思い起こされる記憶のひとつに、家族で観た日曜夜の洋画劇場がある。なかでも録画して繰り返し観たのが、映画「ネバーエンディングストーリー」だった。主人公のバスチアンがいじめっ子に追いかけられ、逃げ込んだ書店で出会った「はてしない物語」という題名の本。本好きのバスチアンはどうしてもその本を読みたくて書店から盗み出してしまい、学校の物置に忍び込んで本を読むことで、現実と本の中の話が交錯していく、という始まりだ。

当時、私はこの映画の原作が、エンデの「はてしない物語」だとは知らなかった。中学校の図書館で、偶然、赤い布張りのきれいな装丁に惹かれてこの本を手に取った時もだ。中をパラパラと読んで驚いた。よく見ていたあの映画の原作なのか、と。思わず表紙にアウリン（作中に登場する本の表紙には、金属でできた二匹の蛇の紋章「アウリン」がくっついているのだ）がないかと確認してしまったほどだ。残念ながらアウリンはついていなかったが、すぐに本を借り、夢中で読んだ。活字がそのまま風景や感情となって脳内で映像化されていく様子は、バスチアンと同じ体験をしているかのようだった。

この本は、活字が二色に分けて印刷されている。バスチアンのいる現実世界の部分は赤茶色の文字、作中に出てくる本の世界（ファンタージエンの話）の部分は緑色といった具合にだ。読み手はその現実と本の中の話を行ったり来たりしながら、いつの間にか「はてしない物語」のなかに引き込まれていく。現実で私が読んでいる本の中に、バスチアンが住む世界があり、さらにバスチアンが読む本「はてしない物語」の世界がその中で詳しく描かれ、さらにその本の世界の中に「はてしない物語」という本が登場するのだ。まさに文字通りはてしない物語である。マトリョーシカのような多重構造で、没入して読み進めていくと、これが現実なのか本の中の話なのか戸惑ってしまうような、不思議な感覚に襲われる。

この本は、映画で描かれなかった原作の続きの部分こそが真骨頂なのだが、ファンタージエンを救ったバスチアンが欲に駆られて自分を見失い、堕ちてしまったあとに、自分が真に求めているものを知り本の世界から戻ってくるという展開となっていく。最近またこの本を読み返したのだが、大人になって経験値をそれなりに積んでからだと、中学生時代に読んだ感覚とは当然ながらまた違っていて、ラストに進むに従って数ページごとに涙腺を刺激された。親になってから読むと、こんなにも感情を揺さぶられるものなのかと驚くほどだった。読み終わった後に、バスチアンや周りの登場人物だけでなく、私も何か変わった気がする、と感じさせてくれるのだ。多感な子どもたちには今のうちに読んでおいてほしい。もちろん大人にも。児童書とはいえ、六百頁の物語は読み応え抜群だ。そしてぜひ、没入感が格段に違うので文庫版ではなく豪華装丁版を手に取って読んでいただきたい。アウリンはついていないけど。

Illustration&Quiz
イラスト＆クイズ

ＰＮ．ブーさん（下呂市）

ＰＮ．木村 ようへい（各務原市）

question❷

出題・林 優奈（各務原市）
〈答えは41ページ〉

季節の順番が秋→夏→春→冬になる場所はどこ？

子の思い

いつもがんばりやのお母さん

中津川市立山口小学校
三年　たて　ももか

お母さん、いつもやさしくしてくれてありがとう。

ごはんをつくってくれたり、せんたくたたみをしてくれたりしてありがとう。

わたしは、毎朝、自分では起きられないので、お母さんが起こしてくれます。起きた後学校へ行くときに、「いってらっしゃい。」と言ってもらえると、うれしくなって、学校に元気で行くことができます。

いつも学校で元気にしているけど、この前、学校で熱が出てしまって、お母さんにむかえに来てもらわなくてはいけなくなりました。しごとでいそがしいお母さんだけど、むかえに来てくれました。むかえにきてくれたお母さんの顔を見て、ほっとして少し元気になったよ。

火曜日と金曜日にお母さんは、お兄ちゃんをじゅうどうのれんしゅうをするために体育かんまでおくっていきます。お母さんも夕方は休みたいと思っていると思うけれど、いつもわたしたちのことを考えてくれています。

お母さんは、いつもみんなよりがんばっているので、わたしもお母さんみたいにがんばりたいです。

いそがしいお母さん、わたしたちのために、いつもありがとう。お母さんがわたしのことをささえてくれているから、元気な毎日をおくれます。

お母さんもたまには、体のことを考えて休んでください。お母さんの元気が、ももかの一ばんのたからものです。

お母さんいつもありがとう。

ももかより

命をかけて、命を救う

岐阜市立日野小学校
六年　仲野　未希

私の夢は、困っている人を笑顔にできる医師になることです。

今はコロナ禍で多くの人が苦しんだり、不安な毎日を送ったりしています。でも私たちが希望をもつことができるのは、最前線で新型コロナと戦っている医療従事者の方がいるからです。本当は自分の命に関わる仕事で、投げ出したくなることもあると思います。しかし報道で、日々命がけで患者を救う努力を続ける姿を見て、あこがれをもつようになりました。

私には将来医師になるために、頑張っていることがあります。それは各教科の学習です。医師になるには幅広い知識や、それをもとに自分の考えをもつことが必要です。また、人と接する以上、自分も笑顔でいることが大切だと思っています。これからたくさんの困難があると思います。けれど私は、医療の現場で働く方々のように、あきらめない気持ちで立ち向かっていきたいです。

部活動について

羽島市立竹鼻中学校
一年　柴田　真緒

中学校では吹奏楽部に入ったので、部活を頑張ろうと思っています。なぜ吹奏楽部に入ったかというと、私の通っていた小学校で鼓笛という取り組みがあり、トランペットを吹いて、上達していく楽しさであったり、皆で心を一つにして一つの音楽を創り上げていく所もやりがいがあったりして、中学校でも、もっと上のレベルで演奏できるように頑張りたいと思ったからです。

私の学校の吹奏楽部は、一年生部員は十人余り、全体として四十人程で活動しています。

この間、一年生は楽器決めがありました。私の希望の楽器はトランペットです。先生の前で色々な楽器を吹いてみて、誰がどの楽器になるか決められます。結果は、私は希望だったトランペット奏者になることができ、とても嬉しかったです。その一方、楽器が決まったことで、このパートを担当することへの責任感も強くなり、よりこれから頑張っていきたいという気持ちが芽生えました。希望の楽器を担当できなかった仲間もいましたが、これから別の楽器を練習していくなかで、その楽器をどんどん好きになってもらえたらいいなと思います。

担当楽器を練習していくのですが、コロナ禍の中で思うように練習できていません。だから、皆で協力してパーテーションを設置したり、それぞれの練習を距離をとってするなど工夫して取り組んでいます。

吹奏楽部は一つひとつの音もきれいですが、全ての楽器が合わさってこそ成り立つものです。だからこそ、先輩や同級生との信頼関係が大切なので、挨拶や反応から進んで取り組んでいきます。また、コンクールが近く、ひたむきに努力する先輩の姿もあこがれなので、少しでも近づくことができるようアドバイスをよく聞いて、日々頑張っていきたいです。

親の願い

多様性を考える

安八町立結小学校
ＰＴＡ会長　狩谷　信孝

私自身の小学校、中学校時代を思い返せば、私は一般的には「勉強のできる子」でした。しかしこれは、勉強が好きだとか、世の中の物事をもっと知りたいとか、そういう前向きなことではなく、「勉強についていけなくなって、みんなから遅れると怖い。だから、勉強や宿題は毎日する。」という心理からくる行動の結果でした。

現在私には長男：中学一年生、次男：小学二年生の二人がいます。長男は「勉強は何のためにやるのかピンと来ない」とゲーム三昧、次男は「面倒くさい！」とテレビ漬けです。私が子ども時代に感じたような危機感は皆無です。将来を案じて私は、二人に当然「勉強しなさい」と言うのですが、同時に、このような親の経験や価値観を元に子どもに一方的

県立大垣桜高校
まんが研究部

月のうさちゃん

逆さ言葉

ひるめしのたのしめるひ
（昼飯の楽しめる日）

土屋 美賀（関市）

にそのように言うのは正解だろうかと、自問自答を始めています。

そのように考え出したきっかけは次男です。次男は「脳性まひ」の影響により右半身の運動発達が緩やかであり、生活に工夫、サポートが必要です。家庭では理学療法に基づくリハビリをしていますが、学校では自然に友達が重いものを運んでくれたり手伝ったりしてくれています（少々の先生のご指導もあったとは思いますが）。人はそもそもまず顔の形から見た目が違い、体の形も違い、中身も考え方も十人十色です。生活するうえでの集団生活のマナーや勉学は、学校生活、授業、宿題を通じて習得します。他者と違いがあっても、それは当然です。当然だからこそ、当然のように補完、協力して支えあうことができます。もし将来を案じるのであれば、そのことも、家庭で子どもと話し合って取り組んでいくことが肝要であると思い始めました。

世界に目を向けますと、「多様性」に注目が集まっています。考え方、経験、身体的特徴、信仰、ジェンダー等で差異や違いがあっても理解、尊重する考え方です。親の経験や価値観だけでなく、「多様性」の考えにも対応できる人間になることができるよう、子どもと接していきたいと思います。

心豊かな人に

関市立富野中学校
ＰＴＡ会長　兼松 芳夫

勉強のできる賢い子に育てる。それはとても大切なことだと思います。ですが、我が家では、人の痛みがわかり、人を大切にでき、思いやりのある優しい人に育ってほしいと妻も私も子どもに願っています。

私が中学生の時の恩師の話になりますが、私はその先生のことが嫌いでした。学習、友達関係、個人のプライベートなど、いろいろなことに口を挟んでくる先生でした。しかし、その先生は何故叱っているのかを、何度も何度も教えてくれる先生でした。次の日には一切その話をしないというメリハリのある先生だったこともあり、叱られたことを引きずらなかった記憶があります。普段の先生はとても明るくひょうきんな方でした。自分が大人になっていく過程で、知らず知らずのうちに駄目なことは駄目ということや、人との関わり方を教えてもらっていたことに気付きました。

そして、私も大人になり、今の家族ができたある日、娘が顔を腫らし、歯を折る怪我をして帰ってきました。下校時に友達二人が喧嘩になり、カッとなった一人の友達が水筒を振り回したところ、その水筒が娘の口にあたったためでした。下校中の出来事でしたので、教育の一環として、学校で指導してもらうことにしました。後日、担任の先生から指導内容の説明がありました。その中で、学校で子ども同士の話し合いの後、先生が娘に「喧嘩をした二人に言いたいことは？」と聞いたところ、娘は「二人、仲良くしてほしい。」と言ったと聞きました。自分のことよりも、友達二人のことを思った言葉をかけてくれた娘の姿に、私達夫婦が大切にしている、心豊かな人に育っていると感じた出来事でした。そんな我が子を誇りに思います。

また、子どもが時折みせる言動を通して、我が子の成長を日々感じると同時に、私達も子ども達に成長させてもらっているのだと実感しています。

今、世の中はコロナ禍と戦っています。悲しいこと、苦しいこと、たくさんあると思います。こんな時だからこそ、笑顔あふれる、心の豊かな人が増えることを私は願っております。

教育の窓

今の子ども達と親世代

岐南町立北小学校
校長　川松 雅史

教師になって三十年以上たち、年々退職の時が近づいてきました。ここ数年かつての教え子と再会する機会が多くなりました。特に前任校は、合計十年間担任をした中学校の校区の小学校であったため、かつて教えた子が保護者となって、別の立場で再会となりました。授業参観等でばったり出くわすと、ついつい昔話や同級生の動向など懐かしい話になります。大人になった姿に名前を聞かないと分からない方ばかりです。逆に、「先生、変わらんねえ」とうれしい声を聞きます。二十年経とうが三十年経とうが教え子から見れば、自分はずっと大人のままなので当然です。子どもの時からは考えられないような「自分の家庭を守らねば」「自分の子を大切にしたい」といった思いを聞くと、その成長に驚くとともに応援したい気持ちになります。

ふと、この保護者の方々を教えていた頃と、今の学校を比べてみました。

かつては、体育祭や文化祭、合唱コンクールなどの行事で集団の一体感を求めてきました。何をするにも、ふたこと目には「仲間を大切に」と言ってきました。仲間と共通の目標を目指し、同じ歩調で協力することこそが大切だ、と信じて指導してきました。

しかし、子ども達を取り巻く環境が複雑になり、価値観が多様になり、かつての「皆が同じ方向を見て、同じ歩調で進むこと」が素晴らしいことは言い切れなくなってきました。むしろ、「自分で考え、自分の判断で、自分のペースで進むこと」の方が求められています。「個に応じた指導」とか最近では「個別最適な学び」を大切にするように示されています。この変化は、Ｓｏｃｉｅｔｙ５・０時代に向けた社会の変革や新型コロナウイルスのような予測困難な対応を迫られるこれからの時代にとって、必要な力が変わってきていることによるのが大きいのですが、子ども自身の変化も影響していると思います。二十年前、三十年前とは明らかに子どもが変わっています。

例えば、価値観が多様になったことで、子ども達が自己肯定感をもちにくくなっています。

県立大垣桜高校
まんが研究部

月がきれいですね。

逆さ言葉

りかがかり
（理科係）

白木 あおい（本巣市）

「どうせ自分なんか」と投げやりな子、多少ほめられてもうれしいと感じない子も増えてきました。それに対し学校では、かつてのように集団づくりを大切にしながらも、個に応じた指導を優先し、一人一人の自己肯定感をいかに高めるかに力をいれています。そのためにどの学校でも子ども達をほめる場、認める場をたくさんつくっています。全員に役割をもたせる、あえてボランティアを募って活躍の場をつくる、などです。また、ほめ方も色々です。「頑張っているね」よりも「前よりも～な所が成長したね」「〇〇さんが、あなたの～がすごいって言っていたよ」と言われた方がうれしいと思います。

以前「人の幸せは、人の役に立つこと、必要とされることである」という話を聞いたことがあります。前述のように、保護者の皆さんの時代とは、学校も子どもも変わってきています。今の子ども達は保護者の皆さんの頃よりも、周りから認められることに飢えています。家庭の中でも各人の役割を決め、役立っている実感を大切にすることで、学校で取り組んでいる「自己肯定感を高めるためのほめ言葉」をかけてあげてほしいと思います。

私にとっては「現任校の子ども達の成長を感じること」とともに、「かつての教え子が立派に成長した姿を見ること」が、何よりもの役立ち感、自己肯定感のもとになっています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

交剣知愛

白川町立白川中学校
教諭　澤田 憲孝

「なんて愛おしい…。」私には、二人の娘がいます。私は、二人の娘のことが、可愛くて仕方がありません。娘が生まれ、初めて抱っこしたときの感動、初めておむつを変えたときのことなど、これから起きるたくさんの「初めて」のことを絶対に忘れないと、心に誓いました。親にとって我が子は、一番可愛くて、なによりも大切な存在です。私の目の前にいる生徒一人ひとりも、その保護者にとって、一番大切にされている存在です。私は、親になってより一層、生徒たちの思いを大切にしていきたいと思いました。生徒一人ひとりとの出会い、縁を大切にしています。

今のコロナ禍の中、学校行事の縮小や延期、中止などたくさんの制限がされています。昨年度、私は一年生の学年主任でしたが、計画されていた宿泊研修が中止になってしまいました。生徒たちは楽しみにしていた分、とても残念そうでした。私は、クラス全員で楽しめるような活動を、達成感が味わえるような活動をさせてあげたいと強く思い、三月の終わりに、地元のキャンプ場でのデイキャンプを企画しました。保護者や地域の方々の協力を得て、火おこし体験をすることができました。全員が火打石を使って火をおこし、その火を使って料理をしました。生徒たち自身で食事のメニューを考えて、地元の食料品店に買い出しにいきました。また、レクリエーションも生徒たちで企画・運営され、とても楽しい一日となりました。笑顔溢れる一日でした。たった一日の活動ではありましたが、生徒たちの笑顔をたくさん見られて、とても幸せな一日となりました。生徒のことを思い、生徒のために協力してくださった保護者や地域の方々との縁に感謝しています。

私が続けている剣道の教えに「交剣知愛」という言葉があります。「剣を交えて愛しむ（おしむ）を知る」と読みます。「稽古をした縁を大切にして、またこの人と稽古をしたいと思ってもらえるような剣道を」という意味です。この言葉は、道場の中だけではなく、学校生活の中にも当てはまる言葉です。私は、これからも生徒たちとの縁を大切にし、生徒たちと共に笑顔溢れる学校生活を送ることができる教員でありたと思っています。

話そう！語ろう！わが家の約束

わが家のルール

瑞穂市立南小学校PTA会長　髙井 克行

高井家の巻 108

当たり前のことが難しいけれど

約束①　挨拶

家を出たとき近所の人に会って、すぐ「こんにちは！」と言えるわが子たち。

子どもたちはどの子も小さい頃人見知りで、知らない人が来ると親の後ろに隠れていました。けれど何度か促しているうちに、今では親よりも先に挨拶をするようになりました。

約束②　夕飯は家族で

朝起きる時間もバラバラ、学校や仕事から家に帰って、各々部屋で過ごしています。ですが夕飯だけは全員で食べるようにしています。

子どもたちに「今日学校どうだった？」とこちらから聞かなくても、自分から「～があったよ」と話してくれます。

約束③　嘘をつかない

私がいつも子どもたちを叱る時、必ず口にする言葉があります。それが『嘘をつかない』です。話したら怒られるかも、と嘘をつくと、嘘をつくことに罪悪感を覚えなくなります。また、それが嘘だと分かった時、信用を失ってしまいます。いくら親子、家族といえど、責任逃れをするための嘘をつかない、これがわが家の一番のルールです。

子どもたちへの贈り物

大垣市立江並中学校PTA会長　桒山 一嘉

桒山家の巻 109

わが家には、中学校二年生の娘と小学校五年生の息子がいます。

「わが家の約束」は、子どもたちの成長に併せて数多く生まれてきました。

今回、この原稿依頼を受けて、過去を振り返ってみると、子どもへの教育と称して親が一方的に作ったもの（特に行動制限）ばかりだと感じ、反省する機会となりました。

そんな中、子どもたちへ「贈った」約束事があります。それが、

「自分の過ちを認め、反省し、行動する」

です。

この約束事を作ったきっかけは姉弟喧嘩でした。共に相手の事をののしり合い、決して自分の非を認めない姿を見て、この約束事を贈り、こう付け加えました。

・自分の過ちを認める事は難しいが、それができる事で人は大きく成長する。

・まずは自分の行動を振り返り、悪いところが無かったかよく考えなさい。

・そして、反省したことを今後の行動に活かせる人間になりなさい。

この約束事が、今も子どもたちの心の片隅に残っていることを期待しています。

お試しクッキング

さつまいもデザート春巻き

岐阜県学校栄養士会

初秋の食べ物で代表的なものが、さつまいもです。拍子木切りにすることで、ホクホクとした食感や、さつまいも本来の甘みを感じることができます。また、カットした時に、身の黄色と皮の紫色のコントラストを楽しむことができます。

つぶあんの甘みとチーズの塩味の絶妙な味わいが、後を引くおいしさです。下ごしらえの工程が少ないため、簡単に作ることができます。ほかにも、チーズだけやチョコバナナ風にアレンジするなど、お子様と何を入れるか相談したり、一緒に巻いたりなど、楽しいひとときを過ごしてください。

材料

【材料】（10本分）1人2本

春巻きの皮……1袋（10枚）
さつまいも……小1本（200g）
つぶあん……100g
プロセスチーズ……100g
（とろけるチーズ）
シナモン（粉）……少々
小麦粉……大さじ1
水……大さじ1
揚げ油……フライパンに1cmくらいの油量

作り方

❶ さつまいもは拍子木切りにして、電子レンジで30秒くらい加熱しておく。
❷ プロセスチーズは短冊切りにする（とろけるチーズでもよい）。
❸ 小麦粉と水を溶かしておく。
❹ 春巻きの皮を◇に置き、手前の方にさつまいも、つぶあん、チーズをのせてシナモンを振りかける。
❺ 手前の端と両端を折ってからクルクル丸め、先端に❸をぬって留める。
❻ フライパンに油を入れ、揚げ焼きにする。裏返して全体がきつね色になったら出来上がり（お好みで食べやすい大きさにカットする）。

●栄養価（1人あたり2枚で2本）

エネルギー	269kcal
たんぱく質	8.1g
脂質	8.7g
カルシウム	151mg
鉄	0.8mg
亜鉛	0.9mg
ビタミンA	53 μgRE
ビタミンB_1	0.07mg
ビタミンB_2	0.11mg
ビタミンC	12mg
食物繊維	2.5g
食塩相当量	0.6g

9月号の 親子で はてな

Q1 「○○○が赤くなると医者が青くなる」ということわざがあります。当てはまる秋の食べ物は、次のうちどれでしょう？

ア　いちご
イ　柿
ウ　さつまいも

Q2 「敬老の日」の由来になった行事が行われていた県は、次のうちどれでしょう？

ア　兵庫県
イ　岐阜県
ウ　秋田県

応募方法

応募者は、はがきで、9月末までに下記の宛先へお送りください。
（1人1枚・当日消印有効）
※クイズの答えは1問だけでもOKです。

宛先　〒500−8816
岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内
岐阜県PTA事務局
「わが子のあゆみ編集部」

なお、応募はがきには『わが子のあゆみ』への感想・意見やなぞなぞの問題と答え、逆さ言葉などを記入してください。

- ●9月号クイズの答え
- ●郵便番号・住所 学校・学年・氏名 保護者名
- ●『わが子のあゆみ』への感想・意見
- ●「なぞなぞ」の問題と答え
- ●逆さ言葉

7月号クイズ答え

Q1 イ　Q2 ウ

7月号のクイズ当選者

赤堀　晴輝（岐阜市）　市村　優成（関市）
伊藤　慶哉（岐阜市）　鈴木　伶実（郡上市）
藤川　颯太（各務原市）　和田　智咲（郡上市）
吉田　　樹（各務原市）　伊佐治彩那（美濃加茂市）
勝　有萌果（不破郡）　平田　詩織（加茂郡）

なぞなぞの答え

①夏（なつ、かしかった）
②国語辞典の中

高山市立久々野中学校　ふるさとの伝承

地域とともに夢を培う

本校は、「夢を培う学校」を合い言葉に、協同学習、協働実践を通し達成感や貢献感といった「人間的な喜び」を積み重ねることを目的に教育活動を進めています。校区は高山市の南部に位置する自然豊かな美しい地域で、「まちづくり協議会」や「久々野の子どもを育てる会」といった地域の組織と協働し、たくましく生きる久々野の子の育成に力を入れています。

総合的な学習の時間では、こうした地域の資源を活用し、地域と協働した郷土教育を推進しています。一年生では、「地域を育む環境」をテーマに地域の自然や文化、産業について歴史的な背景も含めて探究し、小学校で学んできた地域の概念を広げ深めていきます。二年生では、「地域を支える人々」をテーマに地域で働く人々の誇りや生き方に触れ、働く意義を知るとともに、地域を基盤とした自らの生き方について考えていきます。三年生では、「地域を切り拓く活動」をテーマに地域や社会で生きる一員として、これまで追究してきたことや地域での学びをもとに、自らの課題解決に向け地域や社会へ働きかけていきます。各学年とも一年間のまとめとして、テーマに沿ったお気に入りの写真にキャプションをつけて支所に展示し、地域の方々に発信していきます。

小・中九年間を通した郷土教育により地域に愛着や関心をもち、持続可能な社会への意識や実践力が高まっていくことを願っています。

○一年生「地域を育む環境」

久々野地域の自然の豊かさを実感していく活動として、学校近くの山へ登る自然体験学習を行います。地域の方をガイドに一三〇三メートルの山へ登りながら、自然を満喫するとともに地域の歴史や文化について学びます。毎日仰ぎ見ながら登校している山を体験的に学ぶことで、いろいろな角度で地域を見る目を養うことができます。

○二年生「地域を支える人々」

地域で働いている人々へのインタビュー活動や、地域のプロフェッショナルを学校へ招いてお話を聞く活動から、地域の産業や職業観を学びます。また、伝統や地場産業の継承、豪雨災害からの復旧等のお話から、地域への願いや誇りをつかむことができます。さらに、コロナ禍での人々の生活にも視点をあてて調査し、コロナ禍での生活の苦しさやストップ「コロナ・ハラスメント」宣言を地域へ発信していきました。

○三年生「地域を切り拓く活動」

小学校を含めた地域学習のまとめとして、三年生は、地域の活性化に向けた自己課題をもち自ら行動する取組を行います。人口減少をくい止めようと移住者を増やすため、インスタグラムに地域の素敵な所の写真を投稿したり、コロナ禍で外遊びができない保育園児のために、遊具を作成し保育園に届けたり、修学旅行先では、地域の特産品であるリンゴジュースを観光客にPRするなどアイデアは豊富です。今年度は、大学生と連携したフォトジェニックスポット（写真映えする場所）の開発にも取り組んでいます。

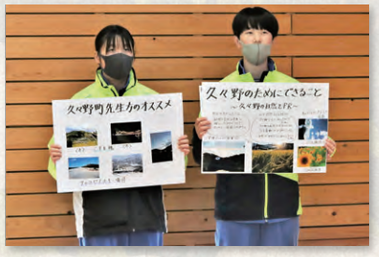
▲1年生：自然体験学習　高屹山への登山

▲2年生：コロナ禍での人々の生活
ストップ「コロナ・ハラスメント」宣言

▲2年生：プロフェッショナルから学ぶ
伝統産業「小屋名しょうけ」の伝承

▲2年生：プロフェッショナルから学ぶ
豪雨災害からの復旧

▲3年生：地域貢献活動
修学旅行先で特産品の「リンゴジュース」を観光客にPR



▲3年生：地域貢献活動
地域の素敵な所を写真に撮り
インスタグラムで紹介

2年生：コロナ禍での人々の生活
久々野支所で地域へ発信 ▶

▲全学年：ふるさと久々野をパチリ!
中学生が撮影した地域の写真展

◀3年生：地域貢献活動
フォトジェニックスポットの
開発に向けた、大学生との
リモートによるワークショップ

岐阜市立長森南小学校は岐阜市南東部に位置しており、創立百四十八年を迎える伝統のある学校です。校区は旧中山道沿いの東西に長く伸びた地域で、火祭りで有名な手力雄神社があり、歴史と伝統を重んじた地域です。

地域の方々からは長年にわたって学校の教育活動を支援していただいています。平成二十九年度からは「教育ボランティア」制度を導入しました。授業ボランティア、図書ボランティア、施設ボランティアといった活動により、児童の学習環境を整えていただいています。

コロナ禍のため、昨年度から様々な学校行事や地域との行事が延期や中止になっていますので、これまでに行ってきた取り組みを紹介させていただきます。

特別支援教育の充実

テーマは「にじいろ」。児童の自立支援を目的にした「にじいろカフェ」はその活動のひとつです。児童が店員となり、保護者や地域の方に来店していただいています。児童はどのようなカフェにするのかイメージすることから始めます。さらにメニュー表やコースターを作り、接客中に気をつけることなどを考えます。最後に閉店後のふりかえりを通して、カフェ運営に関する流れを経験します。令和二年度はコロナ禍のため「にじいろカフェ」をオープンできませんでしたが、「Ｎｂｅｒ Ｅａｔｓ」と称して、学校の先生方に注文・配達を行いました。

「にじいろカフェ」を地域の方や学校の先生方に楽しんでいただきました。

「Nber Eats」はタブレットパソコンを使って、先生方の注文を受け付けます。

「にじいろカフェ」では注文をとったり、ドリンクを用意したり、忙しいけど頑張りました。

地域とつながる長森南小学校

本校は各種団体、ＰＴＡ、中学生ボランティア等が一体となって開催する地域行事が多数あるのも特徴です。放課後地域子ども教室「長森南っ子ひろば」、遊びコーナーなどで児童が様々な体験をする「長森南子どもフェスティバル」、工作、体験、遊びなど二十のコーナーで児童が活動する「夢生き生き文化フェスティバル」、また保護者で構成された「長森南おやじの会」主催の「夜の学校探検」などがあります。児童が地域の方とつながる活動を多く行うことで、今の児童が大人になった時も地域で子どもを育てる気持ちが引き継がれると考えています。

「長森南っ子ひろば」は放課後地域子ども教室です。
ビブスには「地域の宝南っ子」と書かれています。

「夢生き生き文化フェスティバル」
民生委員・児童委員協議会による「将棋・五目並べ・オセロで遊ぼう」の様子です。

「長森南子どもフェスティバル」では
わら細工を地域の方に教わっています。
とても親切に教えていただきました。

「夜の学校探検」は「長森南おやじの会」主催です。
他にも学校の畑の管理等、様々な面で支えてもらっています。

先生方から注文された品物を「Nber Eats」で届けました。
うまくいくかドキドキしましたが、大成功でした。コロナ禍でも
形を変えて販売実習を行うことができました。

バレーボール部

私たちバレーボール部は、3年生4名、2年生2名、計6名で練習に励んでいます。バレーボールは6人で試合を行います。だから、一人も欠けることができません。一人ひとりが声を出し、積極的にボールに触れ、楽しく明るく活動することを大切にしています。悩みを抱えたときや、コミュニケーションがうまくとれていない時は、話し合いを重ね、正直な気持ちを互いに受け止め、解決してきました。たくさんの困難を共に乗り越え、中体連では、全員で声とボールをつなぎ、笑顔で1勝します。

野球部

平日は北中学校野球部として、休日は関ケ原中学校野球部と共にクラブとして活動しています。目標（7／10現在）は第32回県中学選抜軟式野球岐阜県大会で優勝することです。そのために、互いに声を掛け合い仲間と協力して、日々の練習に取り組んでいます。

女子バスケットボール部

3年生5名、2年生4名、1年生7名、計16名の明るく元気な部活です。学年を超えて、みんな仲良く、大好きなバスケを全員で楽しんでいます。よりよいプレーをするために、気付いたことや考えたことを互いに伝え合って練習に励み、試合に臨めることが、楽しさの一つであり、私たちの自慢です。

男子バスケットボール部

私たち男子バスケットボール部は、3年生5名、2年生7名、1年生7名、計19名で日々練習に励んでいます。限られた練習時間の中で何ができるのか、自分たちの足りないことは何かを考え、タブレットを活用してフォーメーションの確認や分析をして、練習に取り組んでいます。中体連で一つでも多く勝てるよう今後も努力し続けます。

吹奏楽部

私たち吹奏楽部は、8名の1年生を迎え、3年生9名、2年生11名の計28名で活動しています。コロナの中、思うような練習時間が取れず苦労していますが、少ない時間を効率よく利用して工夫された練習になるよう、日々心がけて練習しています。そのためにも、先輩後輩の区別なく、互いに活発にアドバイスをして、一人ひとりの技術の向上を目指しています。これからも、音楽ができることに感謝して、精一杯演奏していきます。

剣道部

私たち剣道部は、3年生6名、2年生7名、1年生2名、計15名で活動しています。北中剣道部は、全員が中学校から剣道を始めた初心者ばかりのチームです。ですから、チームワークもよく、みんな仲良しです。礼儀を重んじ、基本を大切にして、日々の稽古を行っています。

コンピュータ部

私たちコンピュータ部は、3年生16名、2年生8名、1年生2名、計26名で活動しています。今年度は「毎日パソコン入力コンクール」が開催されるため、それに向けてタイピングの練習に励んでいます。その他にも、ワードやパワーポイントを使って作品を作り上げています。規律をもって充実した活動ができるよう、部長・副部長中心に取り組んでいます。

陸上トレーニング部

私たち陸上トレーニング部は、3年生4名、2年生6名、1年生6名、計16名で日々活動しています。陸上トレーニング部は、毎年行われる「垂井町一周駅伝大会」に向けて練習に励んでいます。コロナの影響で今年度も駅伝が開催されるかわからない状況ですが、体力や走力向上を目指し、仲間と切磋琢磨しがんばっています。

卓球部

私たち卓球部は、3年生13名、2年生14名、1年生13名、合計40名。「1勝（一緒）」を合言葉に活動しています。平日は基礎練習ですが、土曜日は学年関係なく挑戦できるランキング戦があるため、緊張感のある練習をしています。全員では卓球場に入れないため、1年生はランニングやフットワーク、素振りの練習を行い、先輩たちのように長くラリーが続くように、コツコツと練習を積み重ねていきます。

私たちのPTA

土岐市立妻木小学校PTA

頂上神社

校舎

流鏑馬

読み聞かせ

製陶所見学・体験

はじめに

土岐市立妻木小学校は、岐阜県の東南部に位置し、校区には妻木城跡、八幡神社の流鏑馬など多数の史跡や文化が今も継承され、地域学習に大変恵まれた環境にあります。令和二年度には、地域学校協働活動における文部科学大臣の表彰を受けました。学校の教育目標は「じょうぶな体で　よく考え力をあわせて　がんばる子～自分を磨き　仲間と拓く～」です。四つのめあて「まんぞく授業」「さわやか挨拶」「もくもく掃除」「はつらつ運動」に力を入れ、○夢と感動のある学校　○地域から信頼される学校を目指して取り組んでいます。

PTAは、妻木小学校運営協議会と共に、全校児童二百四十二名がふるさとに誇りと愛着をもち、健やかに成長していくことを願って活動をしています。

PTA紹介

今年度のPTAの活動スローガンは「家庭・学校・地域でつくろう笑顔の和」です。子ども達の夢を支えられるように、家庭・学校・地域が協力して安全・安心な環境づくりを進めて行きます。活動の柱に「あいさつ・声かけ運動」を位置付け、地域の方と子どもたちがコミュニケーションを深めていきます。地域学習以外にも、お祭りや伝統行事、地域のボランティア活動等に親子で参加する機会を設けて、世代を超えた交流を通して思いやりや貢献の心を育んでいます。

PTA活動について（これまでの活動より）

同年会を基盤とした本部役員会の団結力がPTA活動を推進してきました。新型コロナウイルス感染症予防のため、例年の活動が制限される中で、逆に今は何ができるか知恵を出し合い、やり方を工夫しながら活動を行っています。

日時計

花壇整備ボランティア

ケーキ作り

愛校作業 草取り

愛校作業 ペンキ塗り

花壇整備ボランティア

春と秋の年二回、校内の花壇と学校周辺の交差点花壇の整備を行っています。学校運営協議会の関係団体の方々（妻木公民館・青少年育成町民会議・つまぎいきいきクラブ・PTA）と協力して今年度も春に植え替えを行うことができました。

保健母親部会　親子ケーキ教室

例年、十二月に希望者を募り、学校でクリスマスケーキ教室を開催しておりました。しかし、昨年度は、全家庭にレシピと材料を配付する方法で実施しました。役員が講師の先生の動画を撮影・編集して、学校HPにリンクして配信しました。大変好評で各家庭で、都合のよい時間に家族で一緒にケーキ作りを楽しみ、笑顔をつくることができました。

夢の三行詩（家族で語ろう「あったか言葉」）

岐阜県PTA連合会の取り組みを受けて「シェアドリーム～聞こう子どもたちの夢～」をテーマに家族で三行詩を作成しました。家庭学習、歯磨き週間、ファミリー読書、ボランティア活動に、新たに「家族の夢」をテーマに加えて「あったか言葉」として募集しました。外出を控えて、家族とゆったり過ごす中、夢を語り合うことができました。

おわりに

昨年度、学校が再開され、子どもも親も改めて学校に通える日常のありがたさを実感しました。先が見えない中、先ず子どもたちの健康と安心・安全を守ることを第一に考え行事の精選を図りました。同時にPTA活動を見直す機会としました。役員の負担軽減から定例の本部役員会を二ヵ月に一回開催としました。今後もこれまでのPTA活動を継承しつつ、状況の変化に応じて「今できること」を地域支援者の方々を交えて熟議し、「未来の妻木を担う子どものために」を合い言葉に、協働して活動を進めていきます。

がんばる子らの

汗と笑顔と眼差しと

可児市立春里小学校

HERO活動(ヒーロー活動)

学校のために、仲間のために自分ができることを見つけて活動をしています。

タブレットの活用

インターネットで調べたり、いくつかの提示資料を見て考えたり、タブレットを活用して子ども達は、課題追究をしています。

春里の人と自然

地域の方から、田起こし、代掻き、田植えの仕方を教えていただき、体験を通して学んでいます。この後、収穫も行います。楽しみです。

あおぞらタイム

２時間目が終わると、20分間のあおぞらタイムがあります。子ども達は待ってましたと外に出て学級遊びを楽しんでいます。

学校探検

２年生が１年生を優しくサポートして、校内を案内しました。

大豆博士になろう

JAの方を迎えて、大豆の勉強をしながら、栽培をしています。子ども達は、大豆の収穫等、今後の活動を楽しみにしています。

機関誌「わが子のあゆみ」
令和3年度　初秋号
第73巻2号　通巻467号

発行／令和3年9月1日　岐阜県PTA連合会
〒500-8816　岐阜市菅原町3-3　岐阜県校長会館内
電話／058(262)3257　FAX／058(262)3259
Eメール／info@gifu-pta.jp　ホームページ／https://gifu-pta.jp
編集／岐阜県PTA連合会広報委員会「わが子のあゆみ」編集部
印刷／サンメッセ株式会社